

# 宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

## 第52集

寺界道遺跡、宇治市街遺跡、西浦遺跡、石塚遺跡、  
宇治郡衙推定地、矢落遺跡



2002

宇治市教育委員会

## 序

宇治市内では、近年宅地開発や共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査が増えています。

本書は、宇治市教育委員会が開発事業に伴って発掘調査及び試掘調査を実施しました寺界道遺跡・宇治市街遺跡・西浦遺跡・石塚遺跡・宇治郡衙推定地・矢落遺跡の計6件の成果の概要をまとめたものです。

木幡に所在する寺界道遺跡・西浦遺跡では古墳時代後期の集落跡が検出され、当地に展開する二子塚古墳・木幡古墳群の造墓活動とほぼ軌を一にして集落形成のなされる様子が明らかになりました。二子塚古墳は継体大王を支えた有力な豪族の墓と想定されています。これらの成果は、木幡地域の歴史だけではなく、古代の歴史的変動期を考える貴重な発見であったと思われます。また、宇治市街遺跡、石塚遺跡、宇治郡衙推定地、矢落遺跡においてはかつての土地利用の実態が明らかになりました。

これらの成果をまとめた本書が多くの方々の目にとまり、広く宇治の歴史を知る契機となることを願うものです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました開発事業者の方々を始め、調査期間中にご指導、ご助力を賜りました関係各位に対して心よりお礼を申し上げます。

平成14年3月

宇治市教育委員会

教育長 谷口道夫

## 例 言

1. 本書は、『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の第52集である。
2. 本書は、宇治市教育委員会が平成13年度に実施した、開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査及び試掘調査の概要を  
取りまとめたものである。
3. 発掘調査は、下記の体制で実施した。

発掘主体者：宇治市教育委員会

発掘責任者：宇治市教育委員会 教育長 谷 口 道 夫

発掘担当者：宇治市歴史資料館 文化財保護係 主任 杉 本 宏

主事 荒 川 史

浜 中 邦 弘

嘱託 吹 田 直 子

発掘事務局：宇治市歴史資料館 館長 源 城 政 好

主幹兼文化財保護係長 吉 水 利 明

館長補佐 岡 井 毅 芳

調査参加者：西田倫子・高橋玄太・今治洋子・畑 陽子・志村みどり・久保千恵子・山下 睦・大塚朋世・

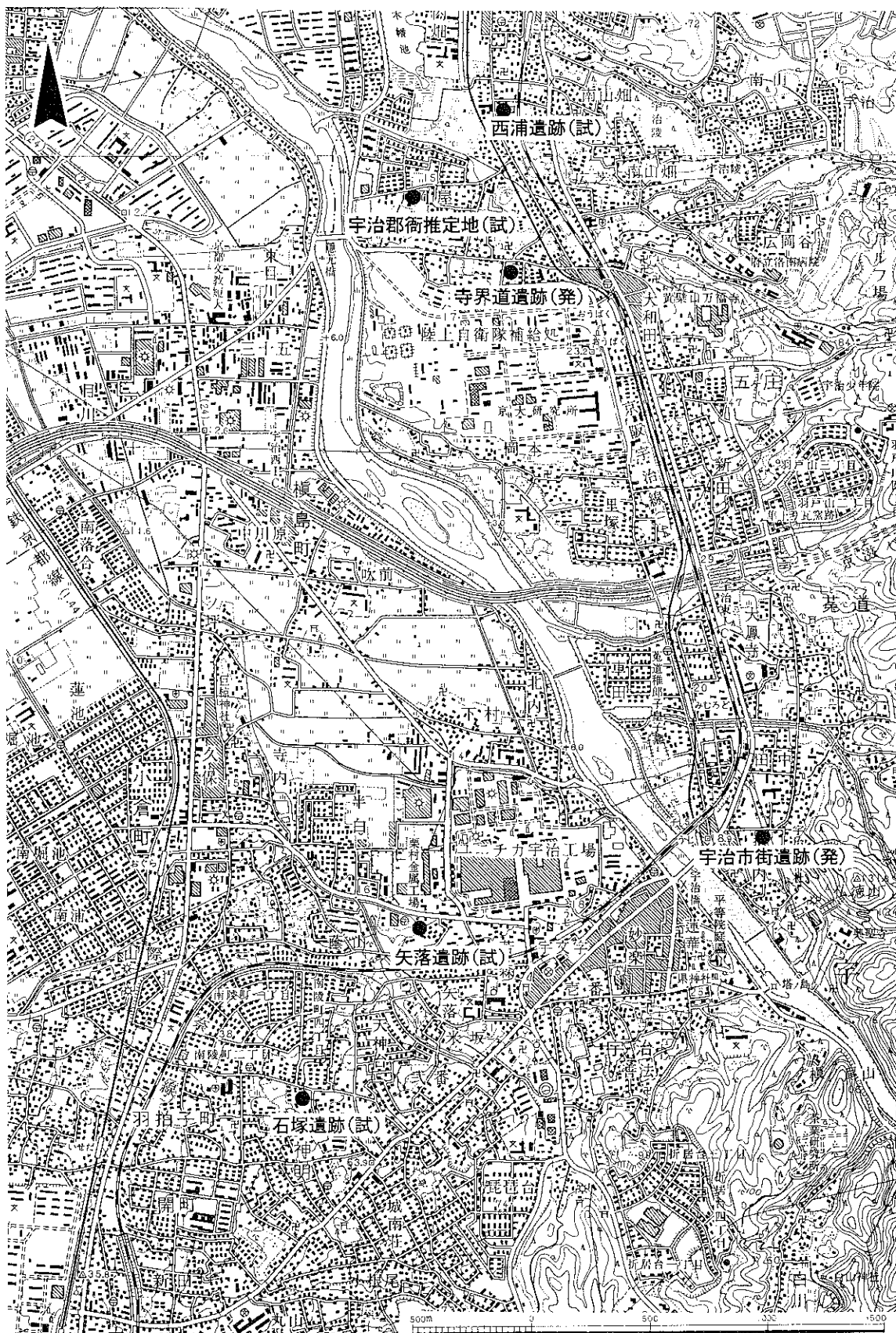
奥 里 子

4. 発掘・試掘調査の関係資料及び出土品は、宇治市教育委員会が保管している。
5. 本書に掲載する写真は、遺構は各担当者が、遺物は吹田が撮影した。
6. 本書の編集は宇治市歴史資料館が行い、実務を浜中が担当した。執筆は下記のとおりである。

浜中 …………… I－A・B・C・E

吹田 …………… II・III

西田倫子（京都橘女子大学大学院生）………… I－D



本書に収録した調査地点

# 目 次

I 寺界道遺跡（五ヶ庄梅林61-4）発掘調査概要	
A. はじめに .....	1
B. 調査の経過 .....	2
C. 検出遺構 .....	5
D. 出土遺物 .....	12
E. まとめ .....	15
II 宇治市街遺跡（宇治東内40-8,41-6）発掘調査概要	
A. はじめに .....	17
B. 環境と経過 .....	18
C. 調査の概要 .....	20
D. まとめ .....	21
III 平成13年度試掘調査の概要	
A. 西浦遺跡 .....	22
B. 石塚遺跡 .....	27
C. 宇治郡衙推定地 .....	29
D. 矢落遺跡 .....	31
註 .....	33
抄 録 .....	34

# I. 寺界道遺跡発掘調査概要

(五ヶ庄梅林61-4他)

## A. はじめに

本概要は、宇治市五ヶ庄梅林61-4の宅地造成に伴って実施した寺界道遺跡発掘調査の成果概要である。

寺界道遺跡は、二子塚古墳の南方に広がる遺跡で、予想される遺跡の範囲は東西約400m・南北約500mと幅広い面積を有する。二子塚古墳は二重の周濠を巡らす全長120mを誇る、古墳後期では南山背最大の前方後円墳である。寺界道遺跡は、この二子塚古墳やその東側の丘陵上に展開する現存120基を有する木幡古墳群の存在から木幡地域の中心的集落が存在するものと想定されている。

寺界道遺跡の発掘調査は、昭和60年度<sup>1)</sup>と平成11年度<sup>2)</sup>とこれまで2回実施している。昭和60年度の調査は、寺界道遺跡の南西部で行われ、縄文晩期の貯蔵穴や古墳時代から奈良時代にかけての集落跡等が発見されている。平成11年度の調査地は、二子塚古墳の南隣接地で縄文晩期から奈良時代にわたる遺構・遺物が見つかった。

今回の調査は事業者である下岡建設株式会社(株)から宇治市が委託を受け実施した。



第1図 寺界道遺跡の調査地点

## B. 調査の経過

開発前の当該地は竹林であった。このため竹林の抜根をまず最初に行い、それが終了した時点の平成13年6月12日に調査を開始した。

開発計画は1戸建て住宅の宅地開発であり、宅地部は大きな掘削がなされないことから、地下に埋蔵される遺跡は大きな影響を受ける可能性が低いことを考慮して、埋管設置等によって掘削が大きく行われる宅地内道路を対象として調査トレンチを設定した。トレンチの幅は道路幅（6m）を基本とした。トレンチは平面的には「T」字状となっている。また今回の開発に伴って、調査地に西接して走る南北道路の拡張工事が計画されており、この拡張部においては宅地内道路の調査成果を踏まえた上で調査計画を立てることとした。

調査はまず表土を重機で排除することから開始した。これまでの調査結果から、調査地北辺に、現在は二子塚古墳の北方を西流する弥陀次郎川の旧流路が西流していることが想定されており、調査地内ではこの旧流路もしくは、氾濫に伴う洪水層の存在が考えられた。このためまず最初に、トレンチ予定地の北・西・東各端部にグリッド状に試掘掘削を行って土層の層位関係を確認し、その状況をもとに掘削の詳細な計画を立てることとした。

トレンチは変則的な形状であるため、便宜的にⅠ～Ⅲ区の3地区に分けて整理を行った。

調査は想定通り洪水層と判断される互層をなして堆積した砂礫層がいずれの地区からも認

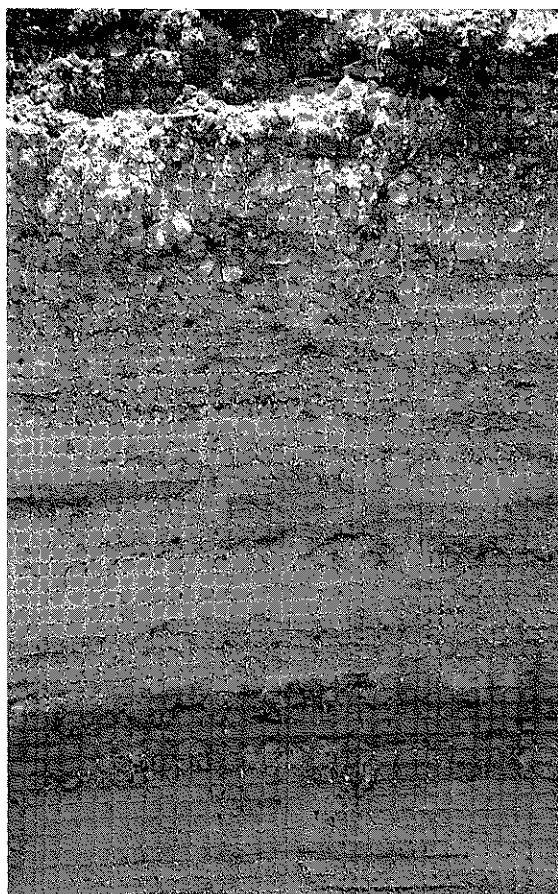


第2図 調査前の状況（南から）

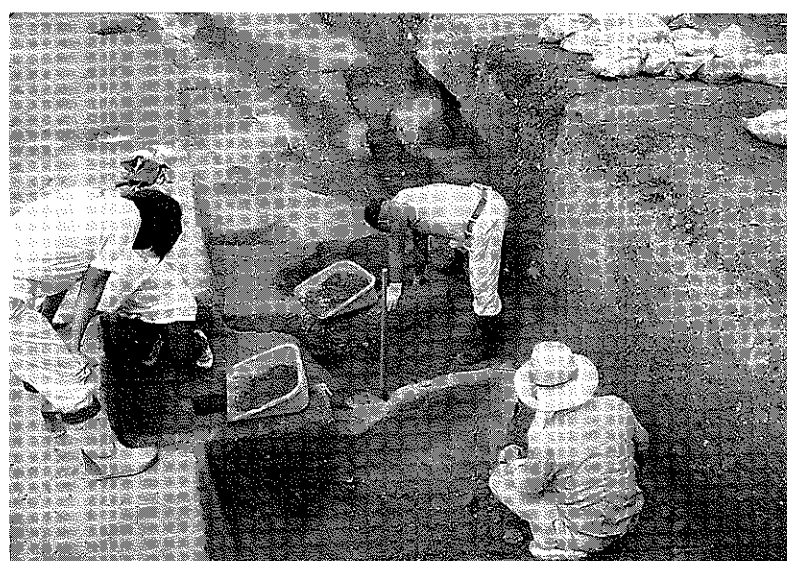
められた。特に北端部で顕著にみられ、全体的には北東部から南西部に向かって、この洪水層は広がる状況が確認された。東端部では洪水層はわずかしか認められず、また他地点よりも一段高い微高地状であると考えられた。このため、洪水の影響を受けにくいこの地区(Ⅱ区)に遺構を想定してこの地点の調査を先に進めることとした。またこれらの調査成果から、調査地西側道路拡張部ではその掘削予定深度がこの洪水層内にとどまることが考慮され、このため2カ所にグリッド(G1・G2)を設定して、その状況把握に努めた。

遺構・遺物は想定どおり、Ⅱ区で多く検出された。Ⅰ区(北区)・Ⅲ区(西区)では、遺物は出土したが、明確な遺構はわずかであった。ただしⅠ区北端部では土壌状の遺構が重層的に古墳時代後期の遺物を多く包含した状況で出土した。

検出面は現地表面から2.5m程下と深く、崩落しやすい洪水層が上層に厚く堆積して危険な状態であるため、調査可能な範囲でその内容把握に努めた。検出遺構の平面図・土層断面図・トレンチ位置図等の図面作成及び写真撮影等の記録作成は、遺構の全容が概ね明らかとなった時点で実施した。遺構が密集して検出されたⅡ区については測量会社に



第3図 Ⅰ区北端部の土層状況

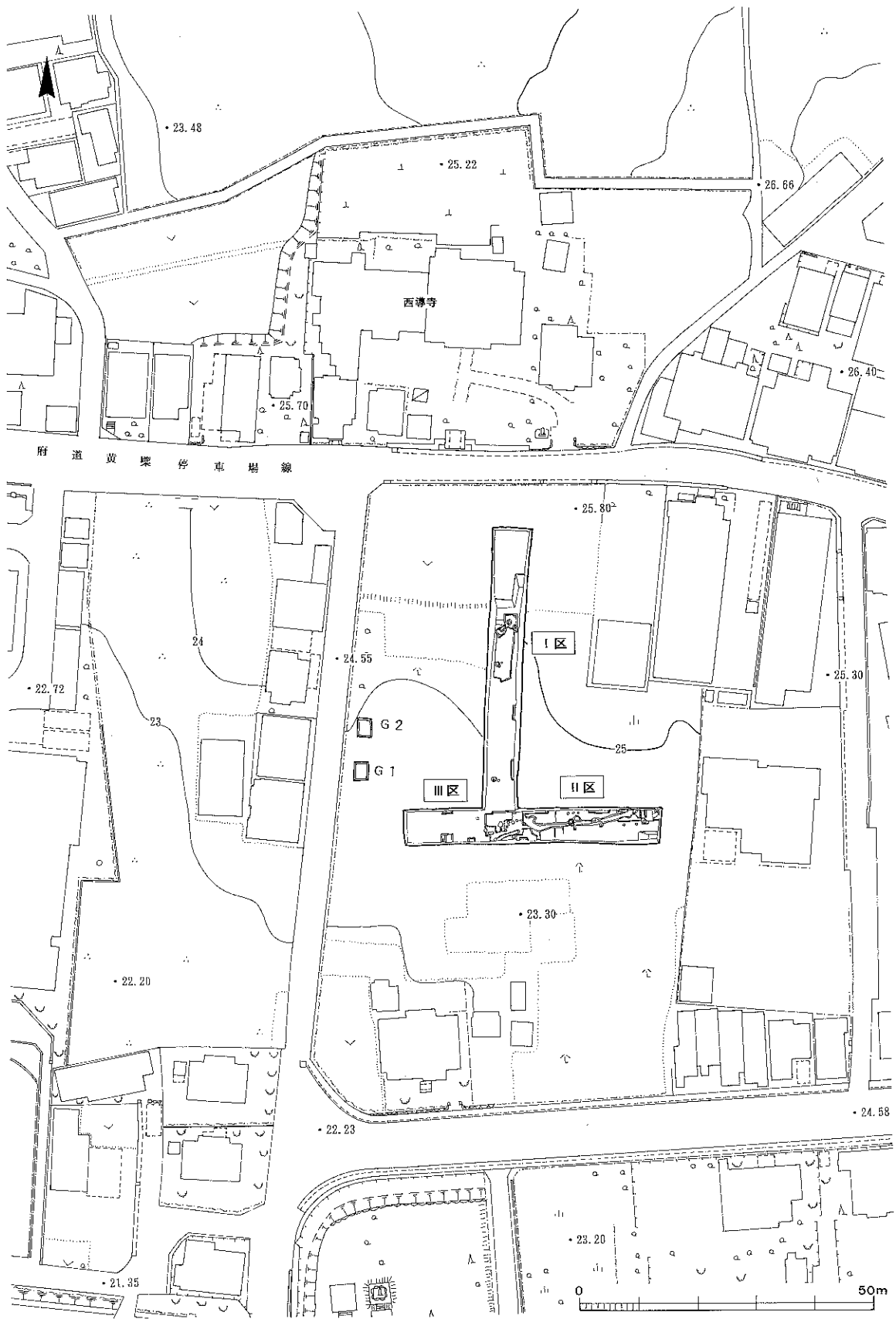


第4図 発掘調査風景

委託した。そして遺構の性格が概ね把握できた段階で報道発表を行い、調査成果を公表した。

埋め戻しについては、開発事業者との協議で実施せずに、図面を作成した段階の平成13年8月14日に発掘調査は終了した。発掘調査面積は計570㎡となった。





第5図 トレンチ配置状況

### C. 検出遺構

ここではトレンチ発掘調査で明らかとなった内容を主に説明する。

**基本層序** 調査前の地形は北東から南西に向かって緩傾斜し、標高差は調査地内で1.8m程ある。土層は竹林に伴う腐植土層（表土層）が20～40cm程をなし、それを除去すると礫を含む黄褐色を基調とする砂質土層となる。この層位は厚く、砂質土と砂礫土の互層にシルト層が部分的に薄く入り込む状況となっている。最も厚い北端部で1.7m程を測る。この層は北東から南西に向かって広がっていくようで、南西にいくに従い堆積層も薄くなる。弥陀次郎川の旧流路想定ラインは調査地北東辺で南から西へ急激に流路変更（屈折点）しており、以上のことから、この厚い砂質土層はこの河川の氾濫によって形成された洪水堆積層と理解された。この洪水層を除去すると礫を含む黄褐色土層がみられ、Ⅰ区（北区）に東西方向、Ⅲ区（西区）に南北方向と各それぞれにほぼ平行して走る溝2条が検出された。溝の埋土内から須恵器片少量と近世期の陶磁器片が出土した。詳細は不明だが、弥陀次郎川が江戸中頃に二子塚古墳北方に流路変更したことを踏まえると江戸前期頃の洪水に伴う堆積層と判断した。黄褐色土層はトレンチ全体に20～40cm程の厚さで堆積する。この層位を除去すると茶褐色シルト層が現れ、この層位から古墳時代から奈良時代にかけての遺構が確認された。遺物は、大半が遺構出土ではなく層位中という形でしか認められず、また遺構の有様はⅡ区西側で一段掘り下げて調査したところ、層位内での重層的な遺構の状況が看取された。このためこの茶褐色シルト層は漸移層と判断、今回検出した以上に遺構があるものと思われた。下層は断割調査で確認し、Ⅱ・Ⅲ区では50cm程下で地山層の黄褐色土が確認された。

**竪穴住居 S B 28** 住居跡北側が辛うじて残存しており、全体の詳細は不明である。住居跡の壁面は最も残りの良い北東隅部でも 6 cm程しかない。北壁全長は 3 m程を測る。北壁のほぼ中央にカマドが付設される。カマドは床面部だけが残る。長軸70cm、短軸50cmの楕円形状を呈し、現存深さは10cm程である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土にカマド壁片が多く混在するが、土器は認められなかった。床面の被熱痕跡は顕著ではない。竪穴住居内からの出土遺物はないが、周囲から出土した遺物から古墳時代後期のものと想定したい。

**溝 S D 31** Ⅱ区のほぼ中央を走り、「コ」字状に北方向に向かって折れ曲がる断面「V」字形に近い溝である。西側については土層の識別が困難で不明。溝の幅は 1～1.2m程で概ね一定の幅で続く。溝の深さは検出面から40cm程を測る。切り合い関係から竪穴住居 S B 28に先行する。東側ではさらに大きく 2つの溝に分岐し、いずれも北方向に延びていく。溝底はわずかな傾斜面が認められ、東から西に低くなる。6世紀後半代。

**焼土遺構 S X 32** 被熱痕上に土師器壺が横置きで土圧で押しつぶされた状態で出土した。カマド床面と判断される。被熱痕は長軸60cm、短軸35cmの南北に細長い楕円形状を呈する。



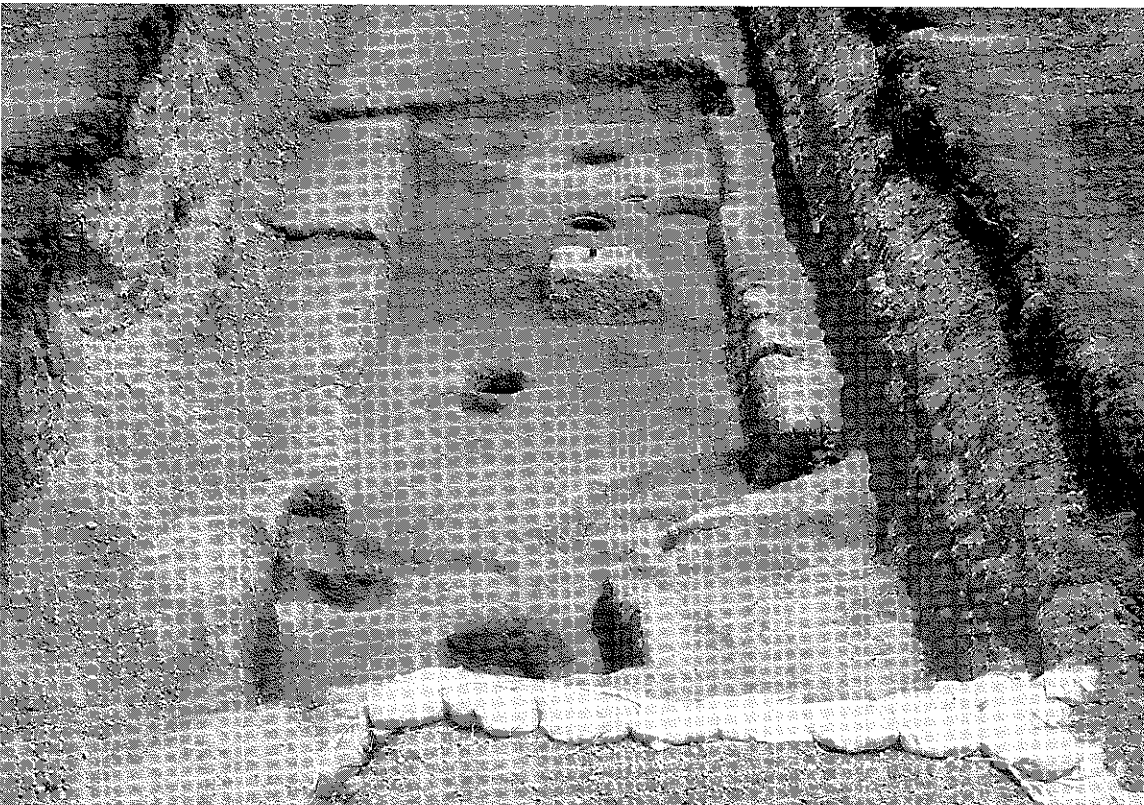
第6図 I区北側上層遺構の検出状況（南西から）



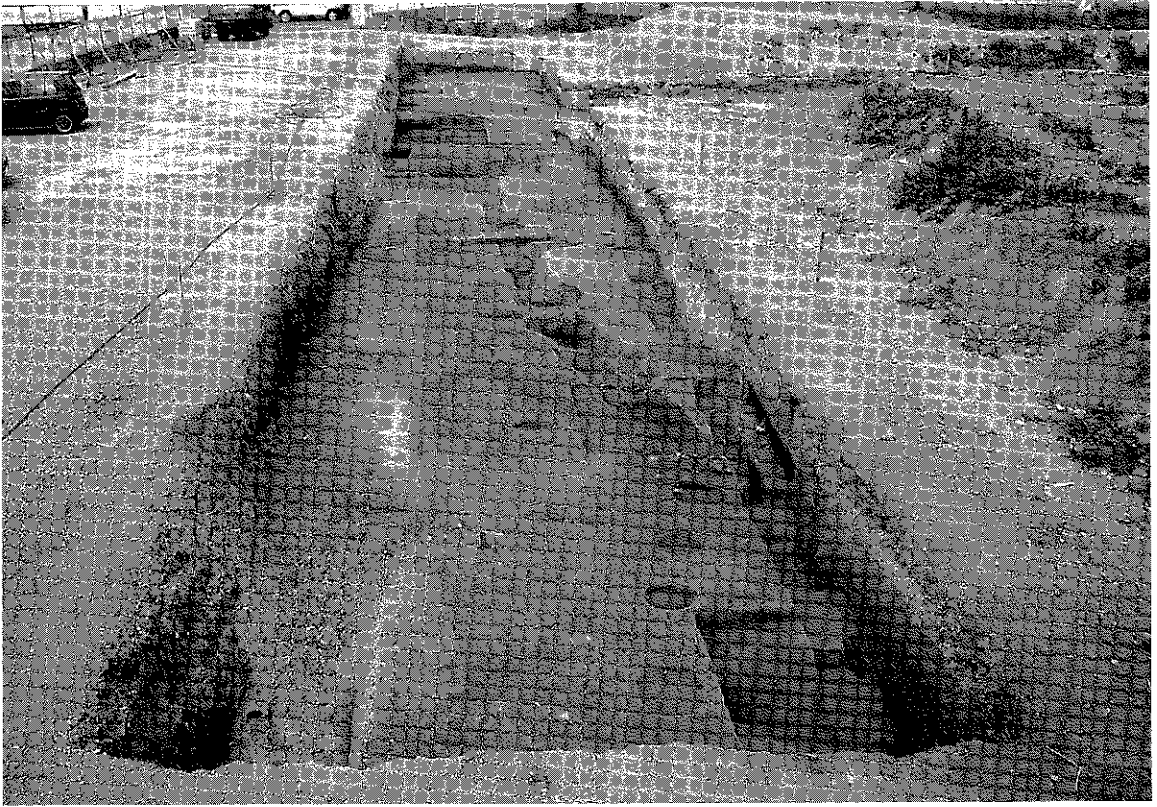
第7図 Ⅲ区西側上層遺構の検出状況（南東から）



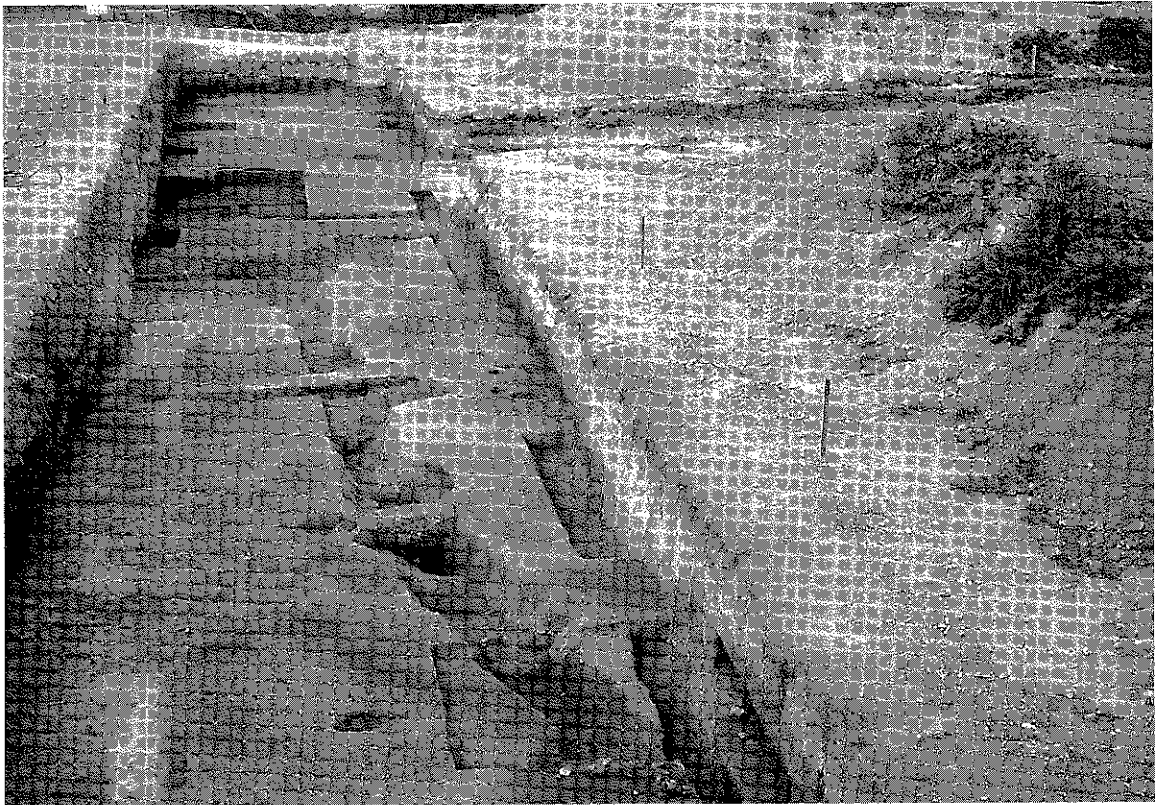
第9図 I区全景（南東から）



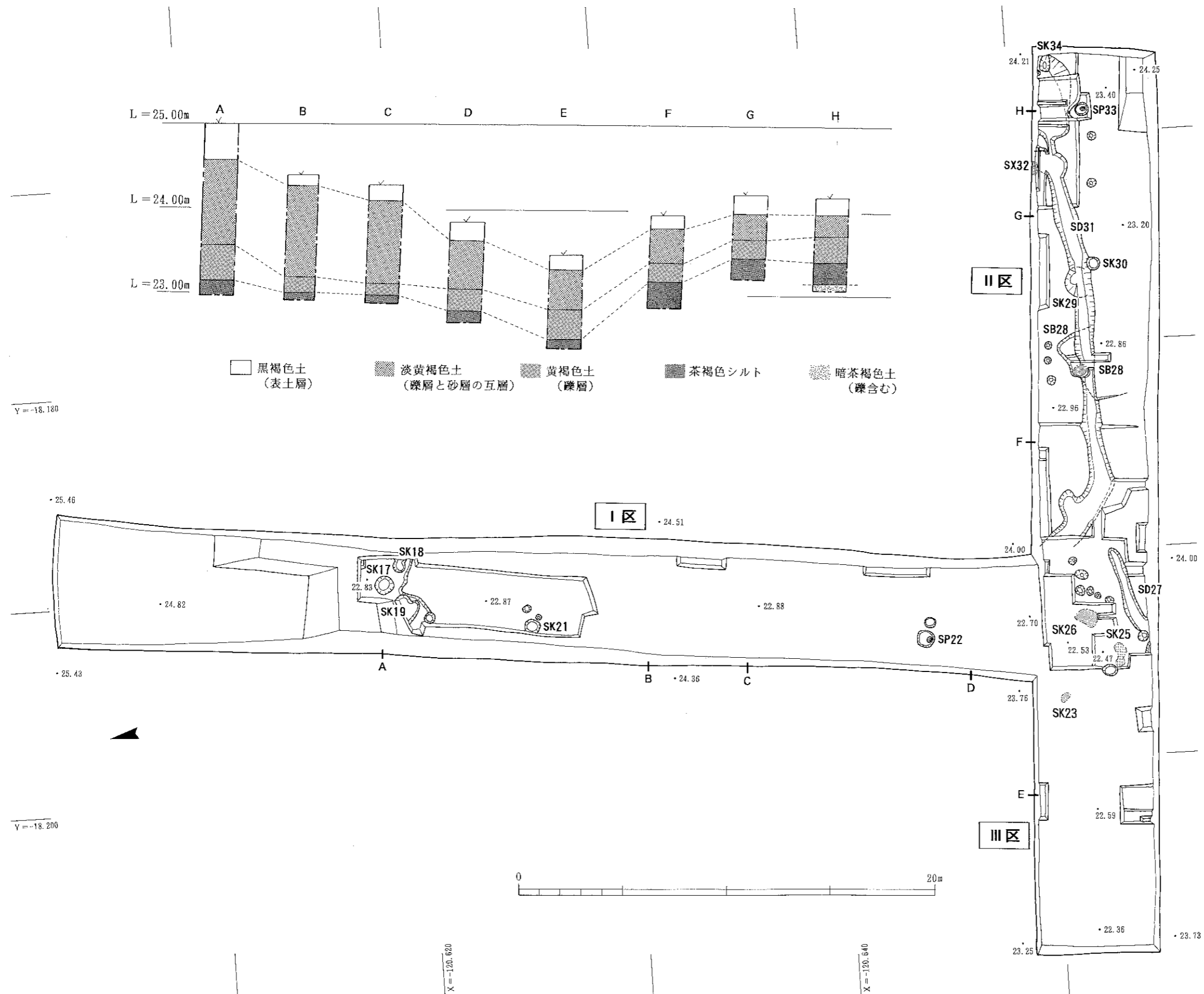
第10図 I区北側遺構検出の状況（北から）



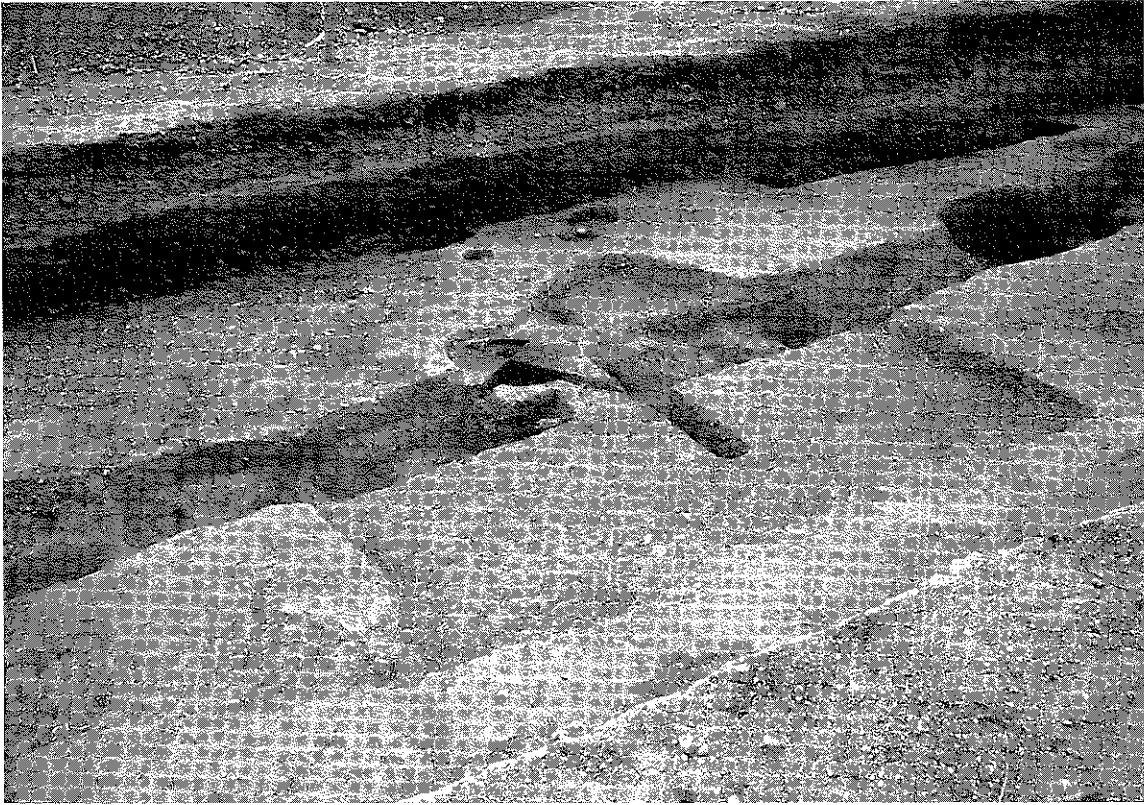
第11図 II・III区全景（東から）



第12図 SD31・SB28・SX32他（東から）



第8図 トレンチ平面図及び土層断面図



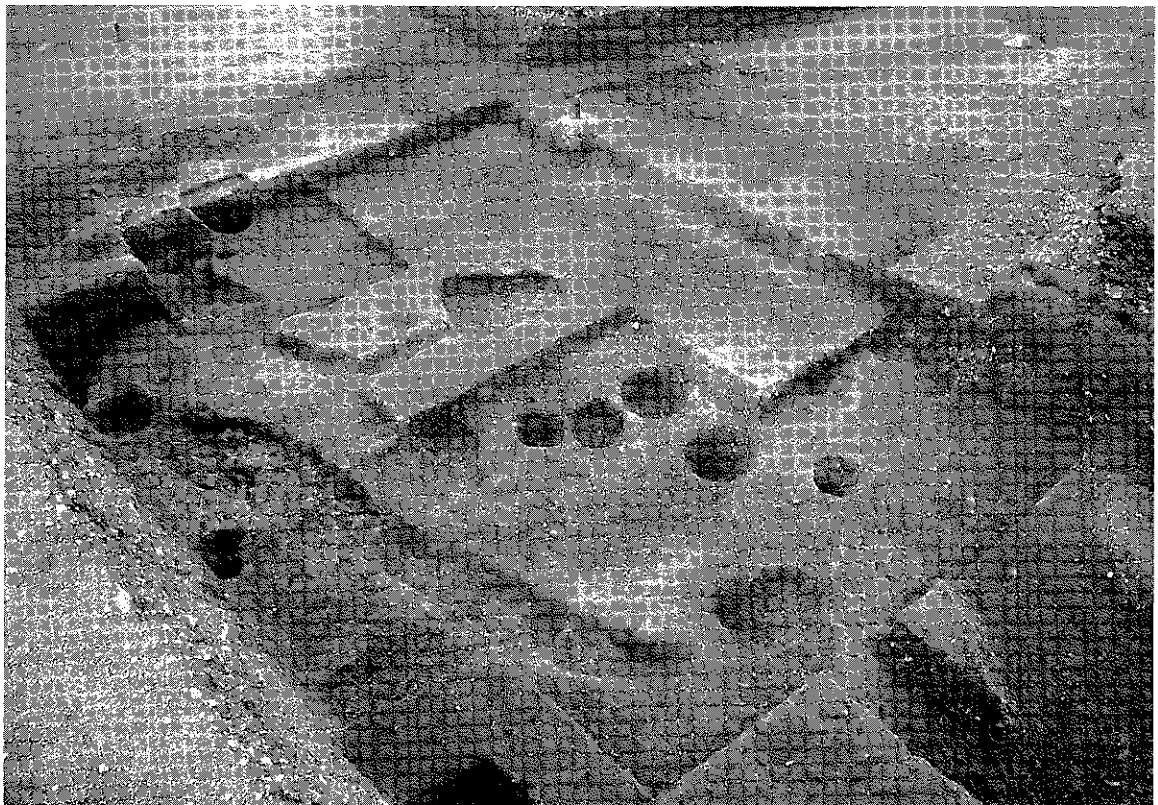
第13図 SB28全景（南西から）



第14図 SB28カマドの検出状況（南西から）



第15図 SX32の検出状況（南西から）



第16図 II区西側の検出状況（南東から）



その両側に被熱痕に沿って幅30cm程の窪みがあり、カマド壁面の痕跡と想定される。住居に伴うカマドかは明らかにできなかった。ただし南側で須恵器・土師器が比較的多く出土しており、その出土状況から北壁にカマドをもつ住居跡の存在を想定したい。古墳後期。

**土壌S K23・25・26** II区とIII区のほぼ中間で検出された遺構。土壌状に掘り込まれ、埋土内に炭・灰を多く含み、焼土片や土器片を少量含む。底面には被熱痕はほとんど伺えない。一時的に焼成を行った際の痕跡と判断されるが、詳細は不明。



第17図 G1・G2の発掘状況（北から）

**溝S D27** II区南西端で検出された東西方向に延びる溝で、現存で幅65cm、深さ10cmを測る。西側はトレンチ外へと続く。無遺物。

**柱穴S P22** I区南側で検出された柱穴である。一辺72~76cmの方形の堀方で、柱穴は直径18~24cm程である。建物の柱穴と理解される。深さは現存で20cmを測る。比較的残りは良く、トレンチ内ではこれと組み合う柱穴の存在が確認されないため、建物はトレンチの西方に展開するものと考えられる。それに従えばこの柱穴は建物の南東隅と理解される。

**柱穴S P33** II区東端部で検出された柱穴である。直径65cm程の円形の堀方で、柱穴は20cm程である。残りは良く、建物の柱穴とすれば建物はトレンチの東方に展開する。

**土壌S K34** II区北東端で検出された東西に細長い土壌。

**土壌S K29** II区ほぼ中央で検出された土壌で、切り合い関係から溝S D31に先行する。溝S D31に切られており、詳細は不明。

**土壌S K30** II区ほぼ中央、土壌S K29のやや南側で検出された円形状の土壌で直径60cm程を測る。

**土壌S K17・18・19・21** I区のほぼ中央で検出された不定型の土壌群。埋土はいずれも土器を多く含む黒褐色土である。土器は須恵器の杯が大半で、古墳時代後期。

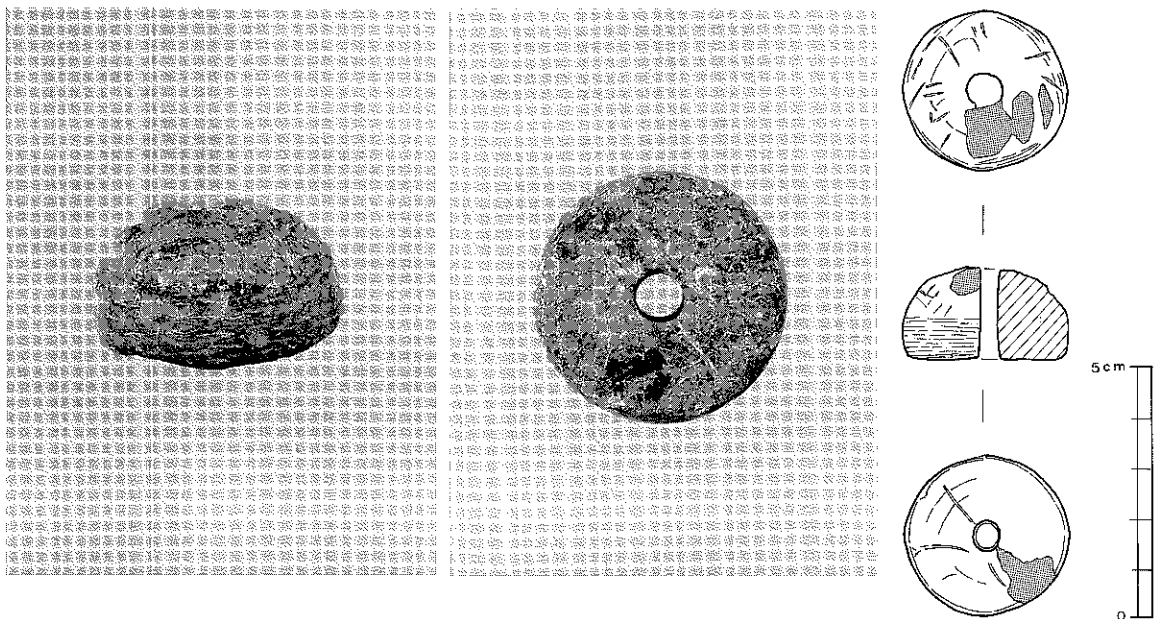
#### 【G1・G2の調査】

掘削予定高を基準として現地表面から0.7m程掘り下げたが、トレンチ内で検出された砂質土層いわゆる洪水層までの範囲にとどまっていた。このためグリッド掘りの調査で終了することとした。

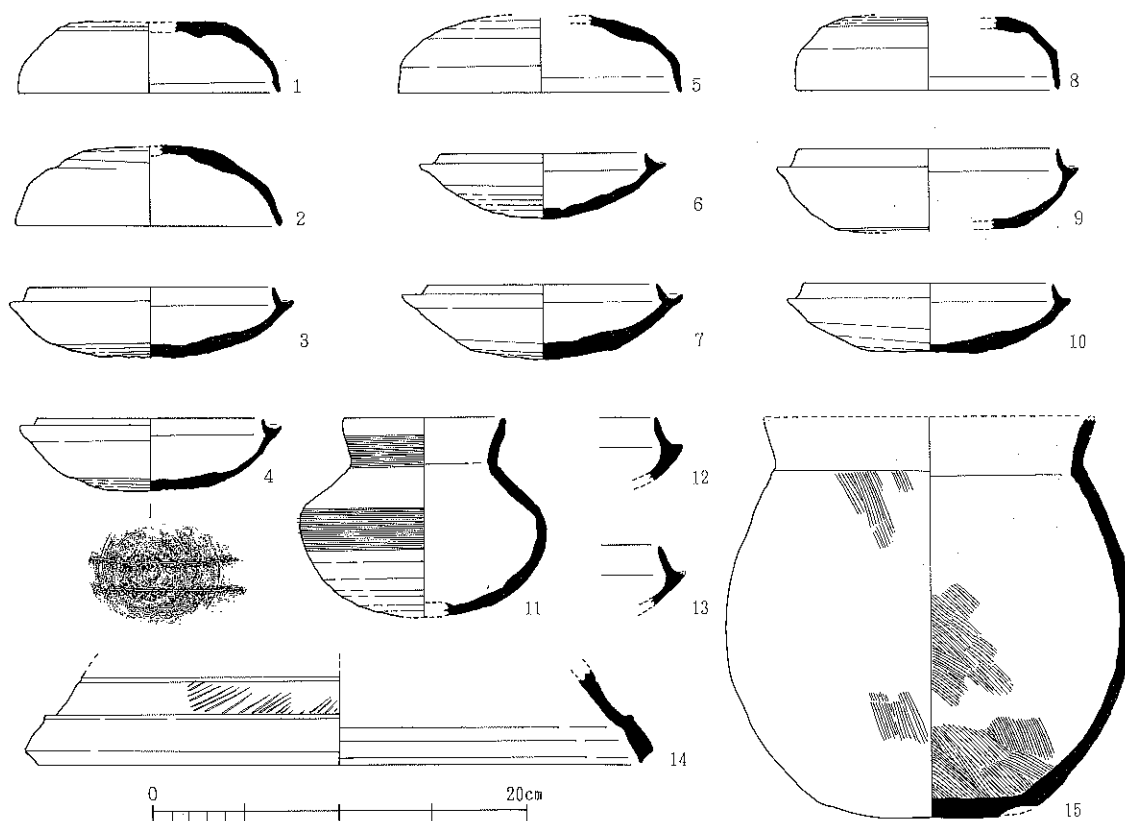
#### D. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、コンテナ箱にして15箱分ある。須恵器が最も多く、その他土師器・紡錘車等が出土している。時代的には古墳時代後期から江戸時代まで確認できる。遺構編で述べたようにⅠ区北部及びⅡ区から比較的まとまって出土し、その大半が包含層出土である。以下、種類別に出土遺物の概要を述べていく。

須恵器（第18図1～14） 1～10・12・13は杯（身・蓋）、11は短頸壺、14は器台の脚部と考えられるものである。1～3・5・6はⅠ区北部、4・7・10～15はⅡ区、8・9はⅢ区から出土している。以下番号順に説明する。1の杯蓋は、天井部を中心に狭い範囲で回転ヘラケズリが施される。胎土はわずかに砂粒を含む。青灰色。焼成良好。口径14cm・器高3.8cm。2の杯蓋は、全体的に丸みを帯び、天井部には回転ヘラケズリが狭い範囲で認められる。胎土は砂粒を多く含む。青灰色。焼成良好。口径14cm・器高4.1cm。3の杯身は、底部から体部中程にかけて回転ヘラケズリが認められる。胎土に黒色の砂粒を多く含む。青灰色。焼成良好。口径13cm・器高3.7cm。4の杯身は、口縁部の立上がりが短く、受け部からわずかに上方に突出するものである。底部に2本の平行するヘラ記号がみられる。胎土に3mm程の砂粒を含む。青灰色。口径12cm・器高3.8cm。5の杯蓋は、全体的に丸みを帯び、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。口縁部付近に濃緑色の自然釉が部分的にかかる。天井部から体部中程にかけて回転ヘラケズリが施される。胎土は砂粒を多く含む。青灰色。口径15cm、復元器高4cm。6の杯身は、Ⅱ区S X32南側で出土。底部から体部の2/5程にかけて回転ヘラケズリが施される。口縁はやや直立ぎみに短く立ち上がる。2次焼成のためか赤褐色化する。

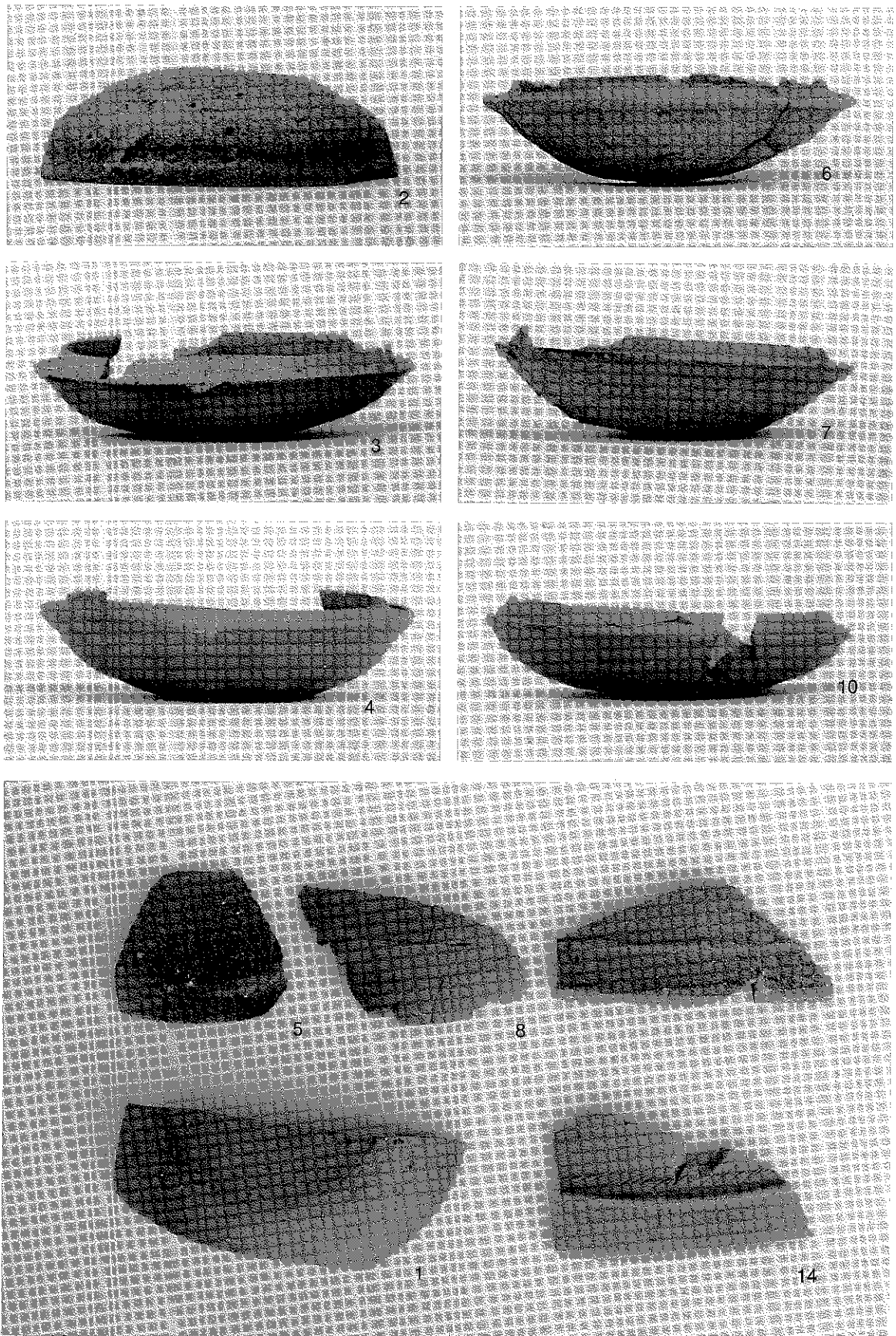


第18図 紡錘車写真（ほぼ原寸）・実測図



第19図 出土土器実測図 (I区:1~3・5・6・14, II区:4・7・10~12・14・15, III区:8・9・13)

口径11cm・復元器高3.5cm。7の杯身は、口縁が内方向にほぼ直線的に短く立ち上がり、口縁部と体部との境目に平坦面をもつ。底部には、狭い範囲で回転ヘラケズリが施される。胎土には砂粒を多く含む。灰白色。口径12cm・器高3.9cm。8の杯蓋は、天井部がほぼ平坦で、口縁部が直線的に立ち上がるものである。天井部には回転ヘラケズリが密に施される。口径14cm・器高3.8cm。9の杯身は、ほぼ平坦な底部に、口縁部がやや外反しながら内方向に長く立ち上がるものである。底部の狭い範囲に回転ヘラケズリが施される。胎土に砂粒を多く含む、色調は青灰色を呈する。復元口径13.6cm・復元器高4.2cm。10の杯身は、底部から体部中程にかけて回転ヘラケズリが認められる。口縁の立ち上がりは短い。胎土に2mm程の砂粒を含む。焼成良好。青灰色。口径13cm、器高3.6cm。11は、II区S X 25出土の短頸壺。頸下部と体部中程にカキ目を施す。底部からカキ目部位にわたってヘラケズリが施される。内面には横方向のナデが認められる。胎土に3mm程の砂粒を多く含む。焼成不良。灰白色。口径8.6cm・器高10.6cm。12・13は杯身の口縁部。口縁の立ち上がりは長いもので前述のものより古相を示す。胎土に砂粒はほとんど認められず、色調は青灰色である。14は器台の脚部と考えられるものである。脚部は底部から幅2cmの範囲で帯状に肥行し、その上部にヘラガキによる斜線文が施されている。胎土に砂粒を多く含む。焼成良好。淡青灰色。復元底径32cm。以上の遺物は、6世紀中頃から後半に位置付けられよう。



第20图 出土遗物写真

土師器（第18図15） II区出土。小型の甕。口縁部は「く」の字状に外方向に開く。内・外面に斜め方向の縦ハケ調整が施される。赤褐色。復元口径17.6cm・器高21cm。

紡錘車（第17図） II区西端部から出土。滑石製。丸みを帯びた截頭円錐形である。底部には穿孔とその外側に同心円状に巡る浅い沈線が認められる。側面部の全体的な調整は粗く、凹凸や調整痕が明瞭に残る。底部径3.3cm、高さ1.85cm、孔径は約6.5mmである。7世紀前半頃か。

## E. まとめ

以上、簡略ながら今回の発掘調査成果をまとめてきた。最後に周辺で実施された発掘調査成果を踏まえた上で今回の調査成果を整理しておきたい。今回の発掘調査では、古墳時代後期の集落跡が検出された。木幡地域では当該期の集落跡が検出された遺跡に西浦遺跡がある。西浦遺跡は寺界道遺跡の北方、地形的には丘陵から一段下がった、丘陵と巨椋池との狭間の細長い平地部に展開する古墳時代から室町時代にかけての集落跡<sup>3)</sup>である。寺界道遺跡及び二子塚古墳は微高地上にあり、西浦遺跡より標高が高い関係にある。東方の丘陵上には現存で120基余りを数える木幡古墳群がある。6世紀全般にわたって造墓活動が行われていた古墳群である。それ以前の古墳は現在のところ木幡地域では確認できない。木幡地域では古墳時代後期以前に連続して溯れる集落跡の存在は今まで確認しておらず、今回の調査においても確認することができなかった。木幡地域が大きく発展していくのは、古墳時代後期という従来の見解をさらに傍証する成果であったといえる。しかしながら前述の古墳群にみあう程の集落跡の検出状況にまでは至っていない。木幡地域の北方は山科川・堂ノ川の氾濫原にあたり、湿地状となっていることが、これまでの調査などから確認されている。この氾濫原のやや南側に木幡神社遺跡が展開する。木幡神社遺跡の発掘調査<sup>4)</sup>では飛鳥時代から奈良時代までの遺構・遺物が多く検出されているが、古墳時代については今のところ顕著ではない。西浦遺跡では、比較的散漫な形でしか住居跡が出土せず、また地形的な制約上から面的に遺跡そのものにさほどの広がりをもつことはできないことなどから、大規模な集落の存在は考えにくい。西浦遺跡から木幡神社遺跡にかけての一带は、飛鳥時代以降から遺構・遺物ともに密度の濃い状況を示しており、むしろ次の段階に至って発展をとげるようである。古代の北陸道が、木幡神社付近で東折して山科盆地へとぬけることがすでに指摘<sup>5)</sup>されており、そのことを踏まえると、このあたりは山科盆地をぬけて東国へと至る巨椋池東岸の陸上・湖上交通の結節点ではあるが、この要衝地に中心集落域が展開するのは、飛鳥時代以降のことと考えられる。ではそれ以前の古墳時代後期ではどうか。西浦遺跡では見込めないとなるとやはり寺界道遺跡近辺の可能性が高い。宇治市に南接する城陽市での当該期に発生する集落は、



## II. 宇治市街遺跡発掘調査概要

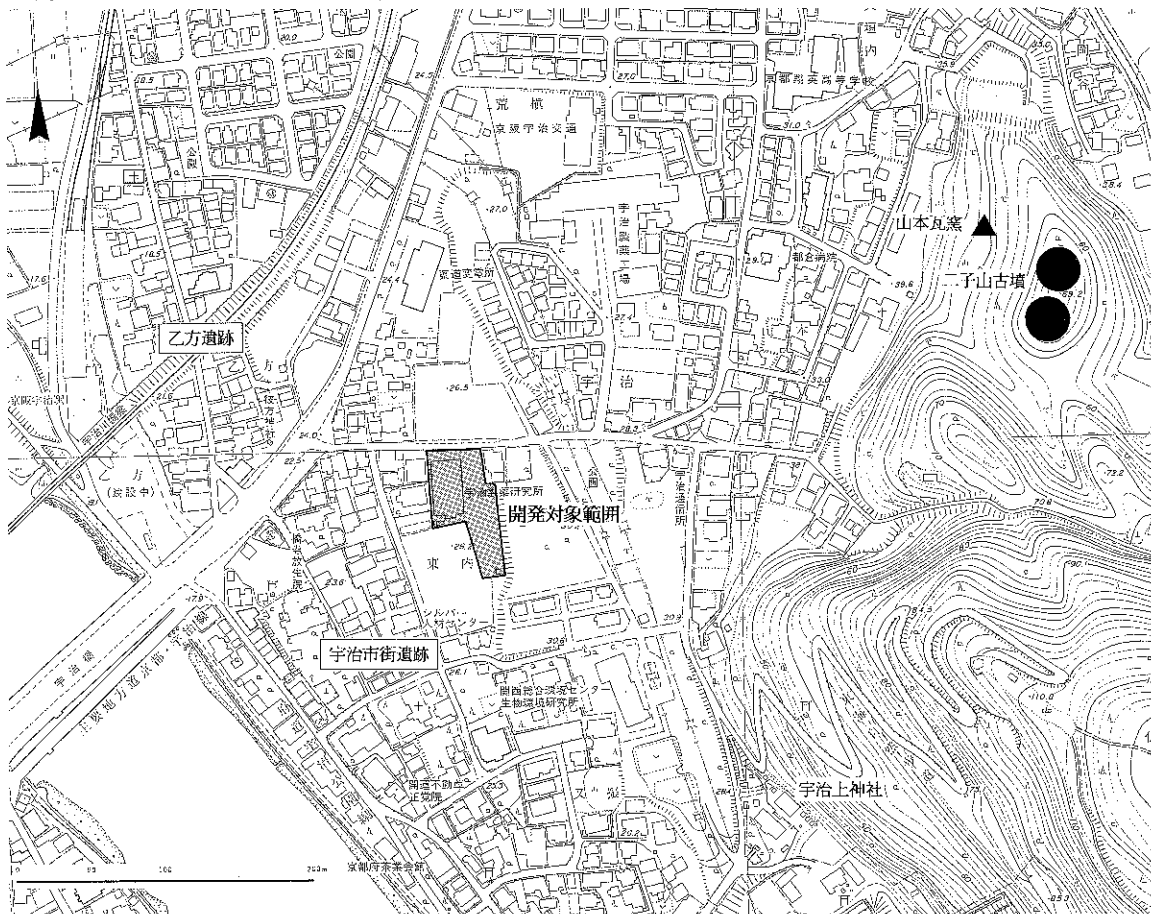
(宇治東内40-8,41-6)

### A. はじめに

本報告は宇治市宇治東内40-8、41-6で実施した、高等学校体育館建設に伴う宇治市街遺跡の発掘調査概要である。

宇治市街遺跡は、市域のほぼ中央に位置する宇治橋の兩岸にかけて、東西約1,500×南北約700mの広がりをもつ遺跡であり、ちょうど現在の市中心街と重なっている現状にある。遺跡の範囲は、古墳時代から江戸時代まで連綿と続く集落遺跡の存在を基本としているが、域内には平安時代に営まれた藤原摂関家の別業群跡、史跡平等院庭園や宇治上神社境内域を含んでいる。このことに知られるように、平安時代以降の宇治市街遺跡の実態は、宇治の求心的な役割を果たした施設などを含む複合遺跡であるといえる。

今回の調査地は宇治川の右岸域に位置し、地形上は河岸段丘上に立地する地点にあたる。調査は事業者である学校法人明珠学園から宇治市が委託を受け、平成13年6月18日から同年7月11日にかけて現地での発掘調査業務を実施した。調査面積は190㎡である。



第1図 調査地の位置

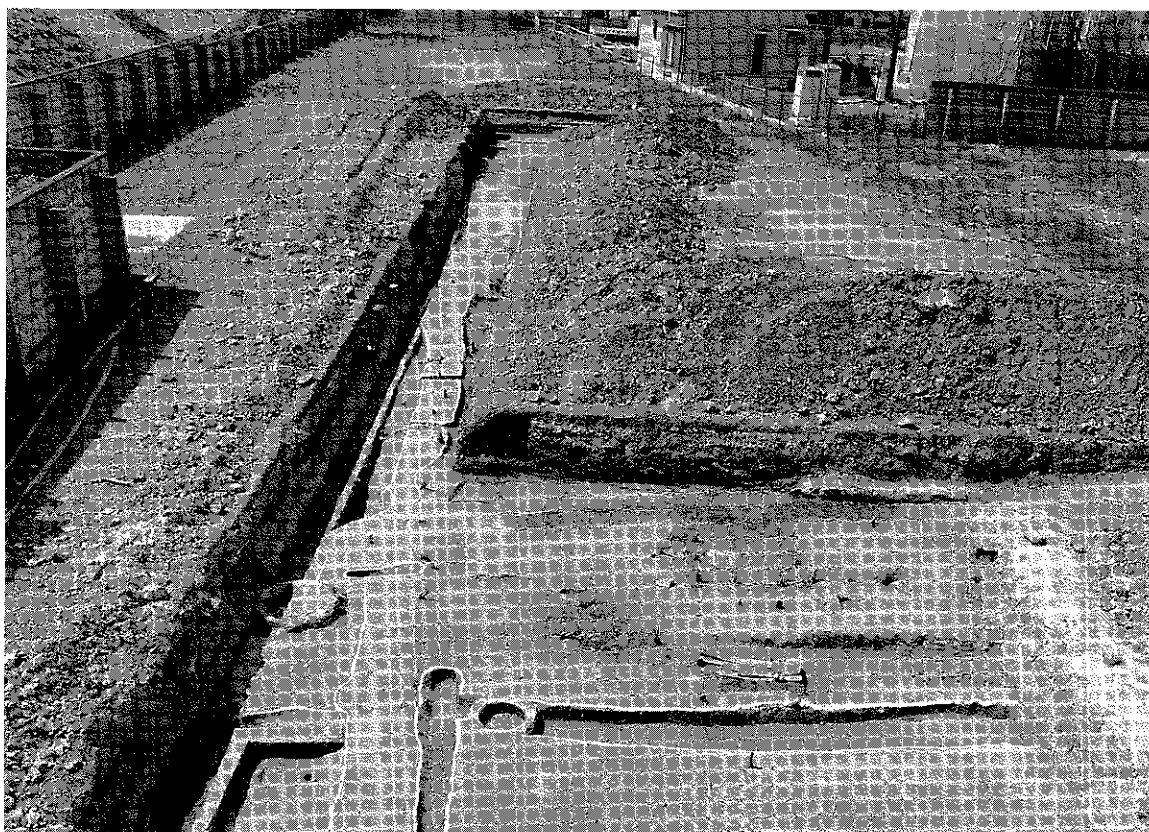
## B. 環境と経過

**調査地の立地** 今回の調査地は宇治橋東詰から東に約250mの地点に位置する。今回開発の対象となった2764.76㎡の範囲は、概ね標高30.5mを測るほぼ平坦な土地であり、四方は住宅地に接している。東側の一部は関西電力の所有する一段高まった更地に接しているが、この高まりは自然地形ではなく現代の盛り土によって改変を受けたものである。

遺跡の右岸域では、近年に特に調査が重ねられている状況にある。中でも本調査地とほぼ同条件の地形上にありかつ隣接する東内38番地での調査<sup>1)</sup>では、近世の遺構を検出したほか、埋土中から古墳時代から奈良時代の土器類が出土していることが注目される。

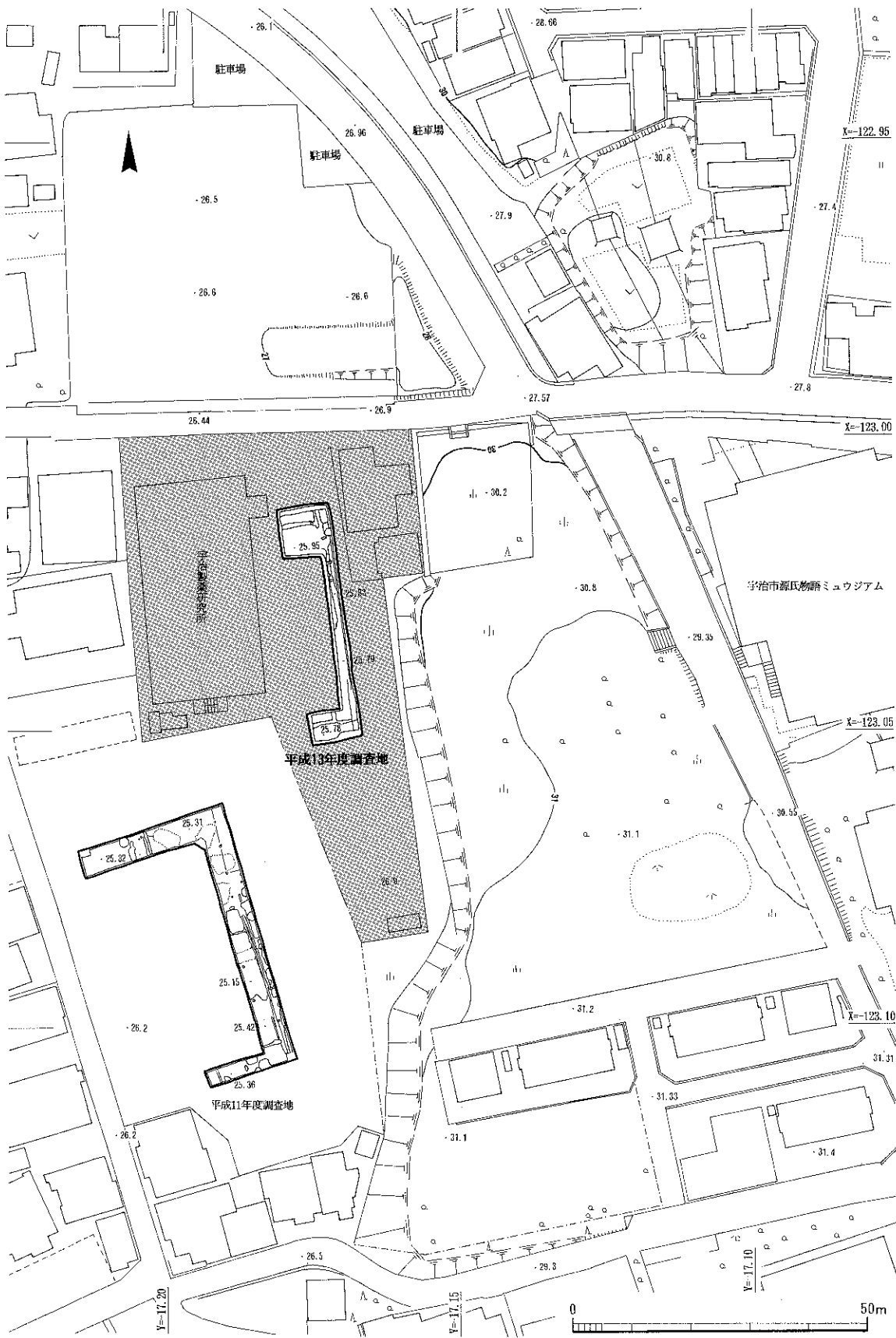
**調査区の設定** 調査地は調査着手時は更地の状態であったが、直前まで製菓会社の鉄筋複数階建の社屋が建っていた。そのため、遺構の破壊が確定的な当該部分を避け、体育館の基礎及び地中梁設置部分に東西約3～9m、南北約40mのトレンチを設定した。

**調査の経過** 調査は表土を重機掘削によって排除し、遺構面に到達した後の遺構検出・掘削作業、遺物の取り上げ作業などについては人力で行った。排土は場内に仮置きした。なお、これらの土砂除去作業業務については事業者から直接提供を受けた。遺構を完掘した後は写真撮影および電子平板測量による20分の1平面図、土層図などによって適時記録を作成し、現地調査を終了した。



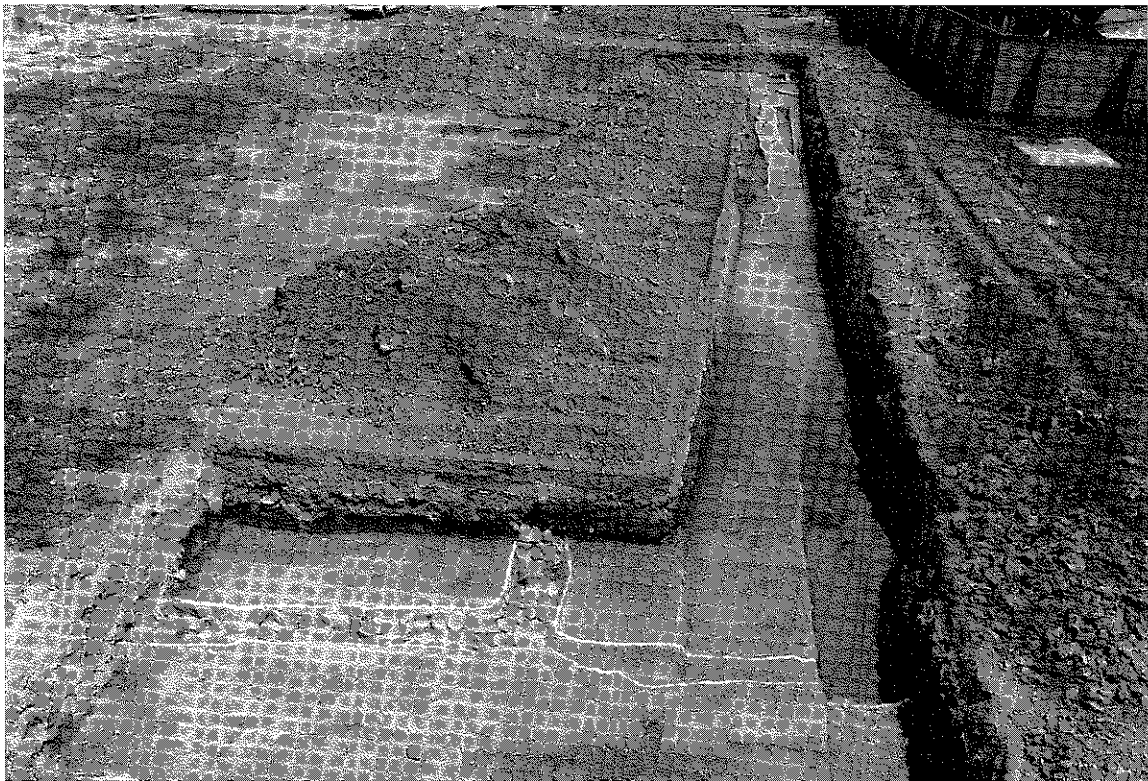
第2図 トレンチ全景（北から）





第3図 トレンチ位置図





第5図 トレンチ南部の完掘状況

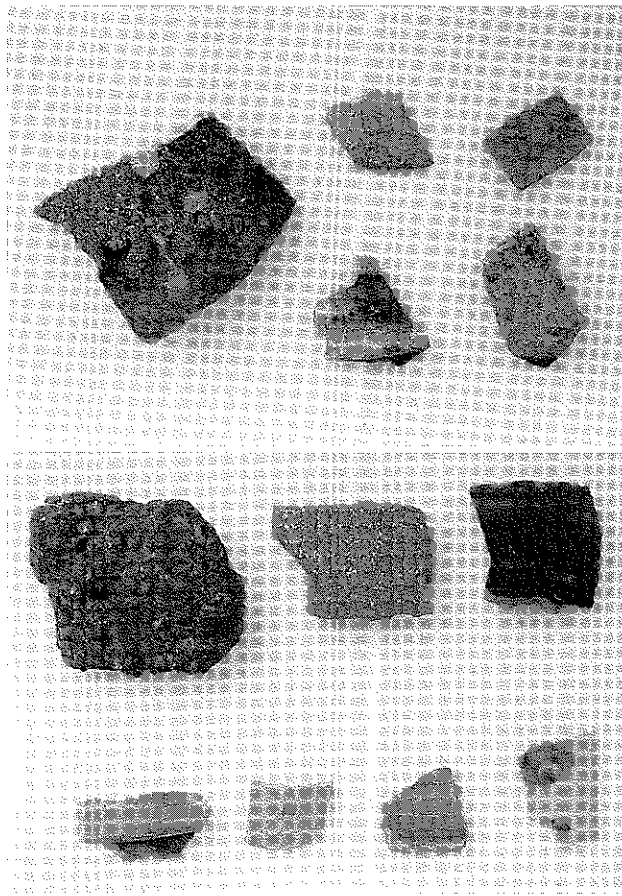
て奈良時代の須恵器杯・壺、中世の土師器皿・鍋・瓦器椀・青磁片がある。

包含層遺物は、近世～近代の土器類・瓦類がほとんどであるが、古墳時代の須恵器・中世の土師器などが少量含まれている。鉄滓もあるが、時期は不明。

#### D. まとめ

今回の調査で検出した遺構群からは、平成11年度調査同様、一帯が近世農村で、主に水田として機能していた状況を窺うことができる。

また、注目すべき点はこれらに含まれる前代遺物である。細片化しているが古墳・奈良・中世と長期にわたっており、付近に各時代の集落が展開していた状況が想定できる。今後注意が必要であろう。



第6図 出土遺物写真(上:SD02・04,下:包含層)

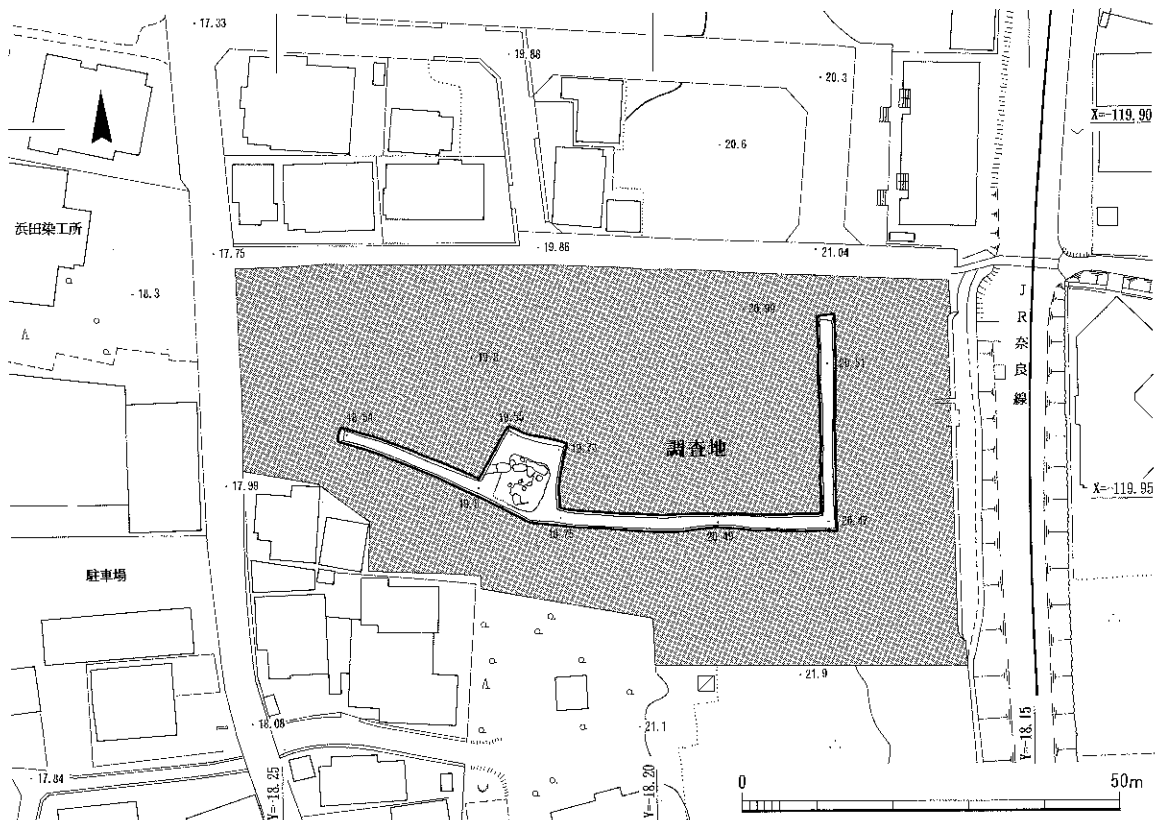
### Ⅲ. 平成13年度試掘調査の概要

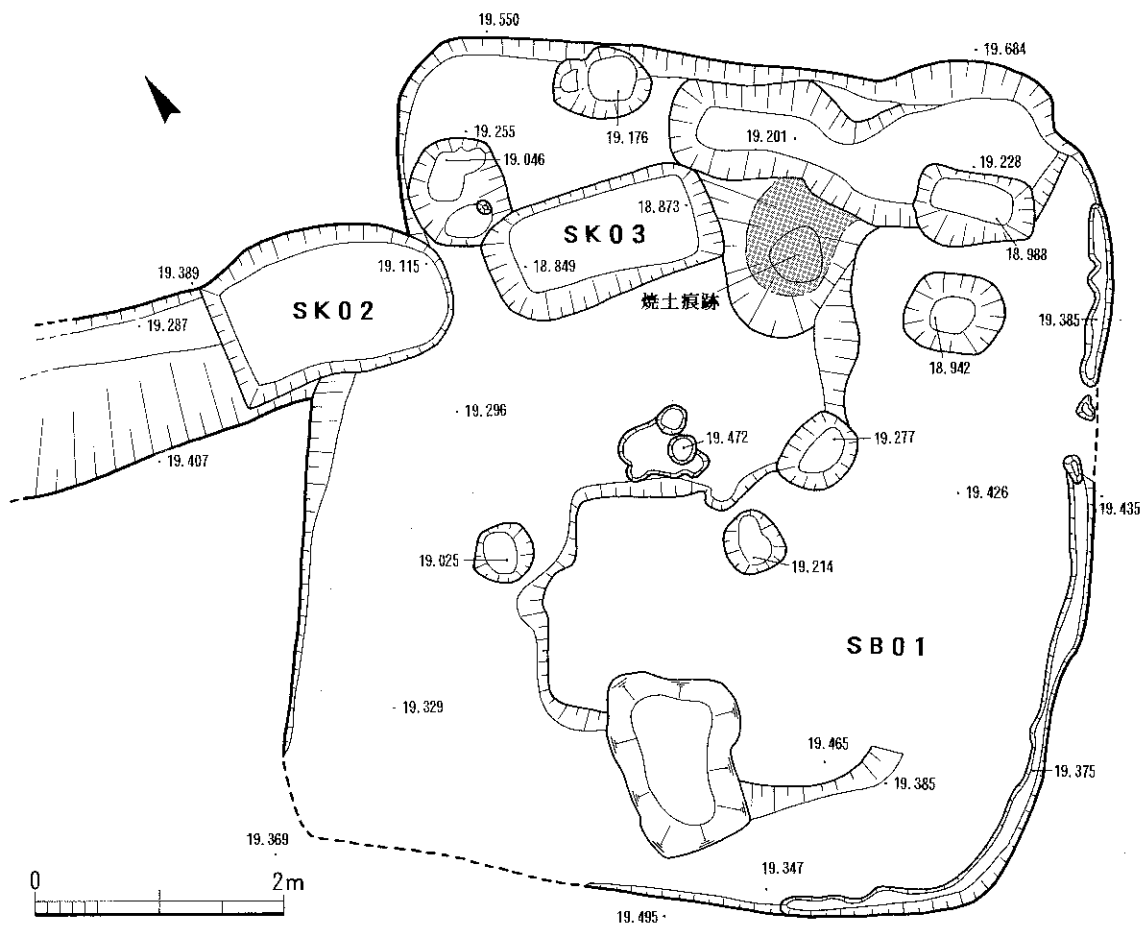
#### A. 西浦遺跡

はじめに 本報告は、宇治市木幡中村37-1で実施した共同住宅建設に伴う西浦遺跡の試掘調査の概要である。

西浦遺跡は、市域北端に近い木幡西浦一帯を中心として、東西約200m、南北約500mを範囲とする古墳～室町時代にかけての集落遺跡である。遺跡は西方に巨椋池を望む平地上に立地しているが、すぐ東側に山稜が迫っているため、池に沿って南北に細長い範囲に広がっている。なお、この山稜には盆地最大の後期群集墳である木幡古墳群が展開している。その他にも、遺跡の約100m南東には後期における山城地域最大の前方後円墳である二子塚古墳が立地しているほか、旧奈良街道が遺跡中央を通過しており、市内でも歴史的環境に恵まれた地域の一つである。過去に4度の発掘調査を重ねており、竪穴住居跡（古墳時代）、掘立柱建物跡（奈良時代・鎌倉時代・室町時代）、墳墓跡（鎌倉時代）などを確認している。

今回の調査は、陸備建設株式会社から宇治市が試掘調査委託を受け、現地調査を平成13年5月9日から開始し同年5月14日に終了した。調査面積は150㎡である。





第 2 图 竖穴住居实测图



第 3 图 竖穴住居写真

**検出遺構** 今回の調査地は、近代には茶畑として利用されていた土地で、後に製茶工場となって現在に至っている。全体的に削平が著しく、地山の標高が高い東側と、攪乱の深かった西側寄りで顕著であった。削平を免れた調査地中央付近の地表下約40cmで、古墳時代後期の竪穴住居1棟と中世の土壇2か所、時期不明の溝1条を検出した。

竪穴住居S B01は、一辺約6.7×6.2mを測り、現存する深さは平均10cmと浅い。中央やや下方には直径約50cmの柱穴が一对あり、支柱穴である可能性がある。加えて住居南東辺にのみ幅25cm、深さ5cmの周壁溝をもつ。この溝は中央付近が長さ約70cmとぎれているが、両端に小柱穴をもつことから入り口にあたる可能性がある。また、北東辺中央付近には、中央に被熱痕をもつ楕円形の浅い皿状土壇が存在する。この土壇と住居壁の間には壁に沿って煙道状の溝が認められることから、カマド跡の可能性が高いと考えられる。6世紀後半。

土壇S K02・03は、それぞれ2.0×1.2m、1.7×1.0mを測る長方形の土壇である。深さは40～25cmを測る。中世の遺物が埋土に含まれることから土壇墓である可能性もある。なお、S B01、S K02・03に切られる溝については、遺物も含まれておらず詳細は不明である。

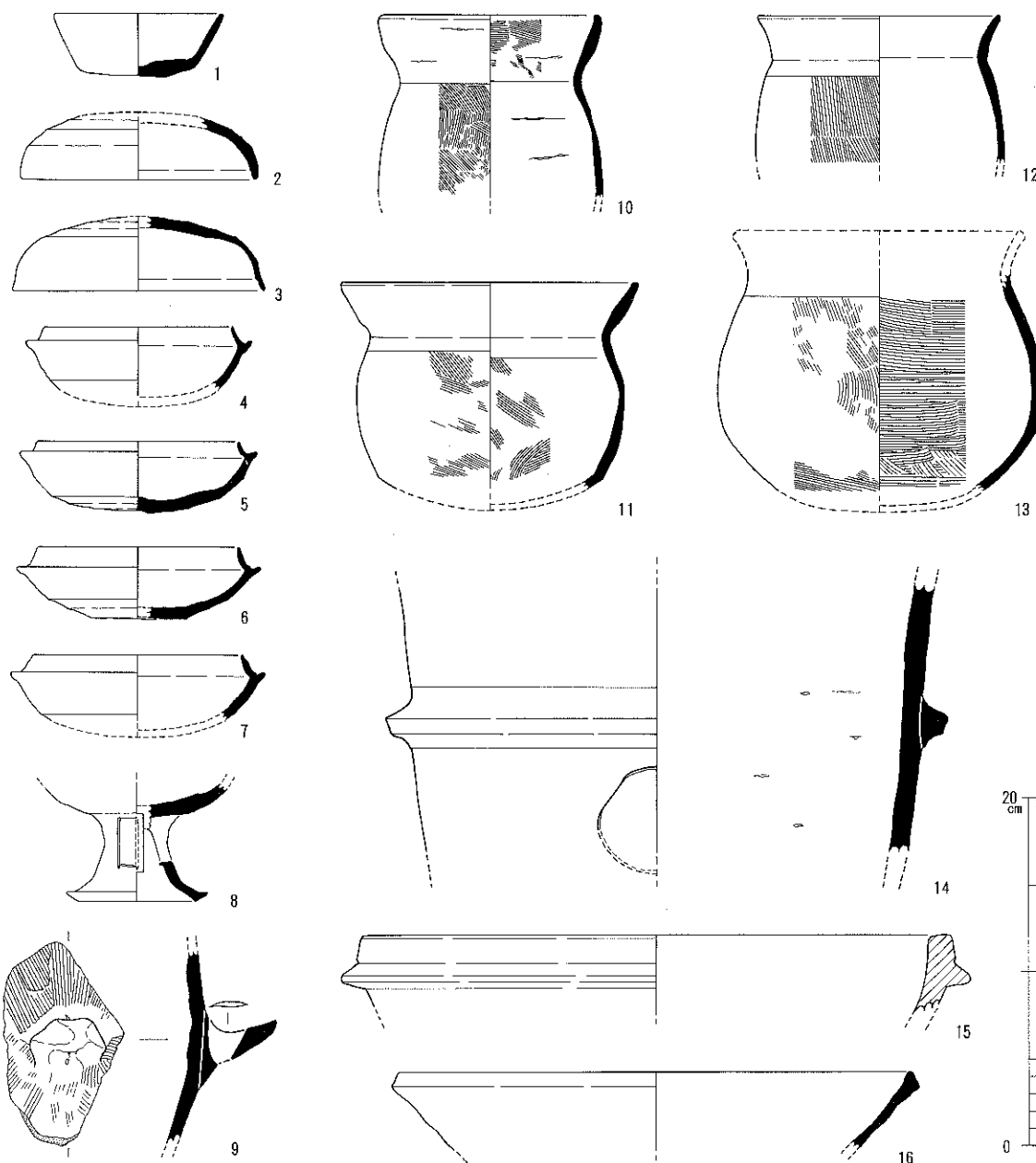
**出土遺物** コンテナに1箱分の遺物が出土している。概ねS B01床面上あるいは埋土から出土しているが、時代は古墳・奈良・鎌倉時代の各期にわたっている。種類には土器類（須恵器・土師器）、埴輪、石製品（滑石製石鍋）がある。S B01に伴う遺物は、2～8の須恵器と9～13の土師器で、6世紀後半期のものである。埴輪は14の1片のみで、付近から流入



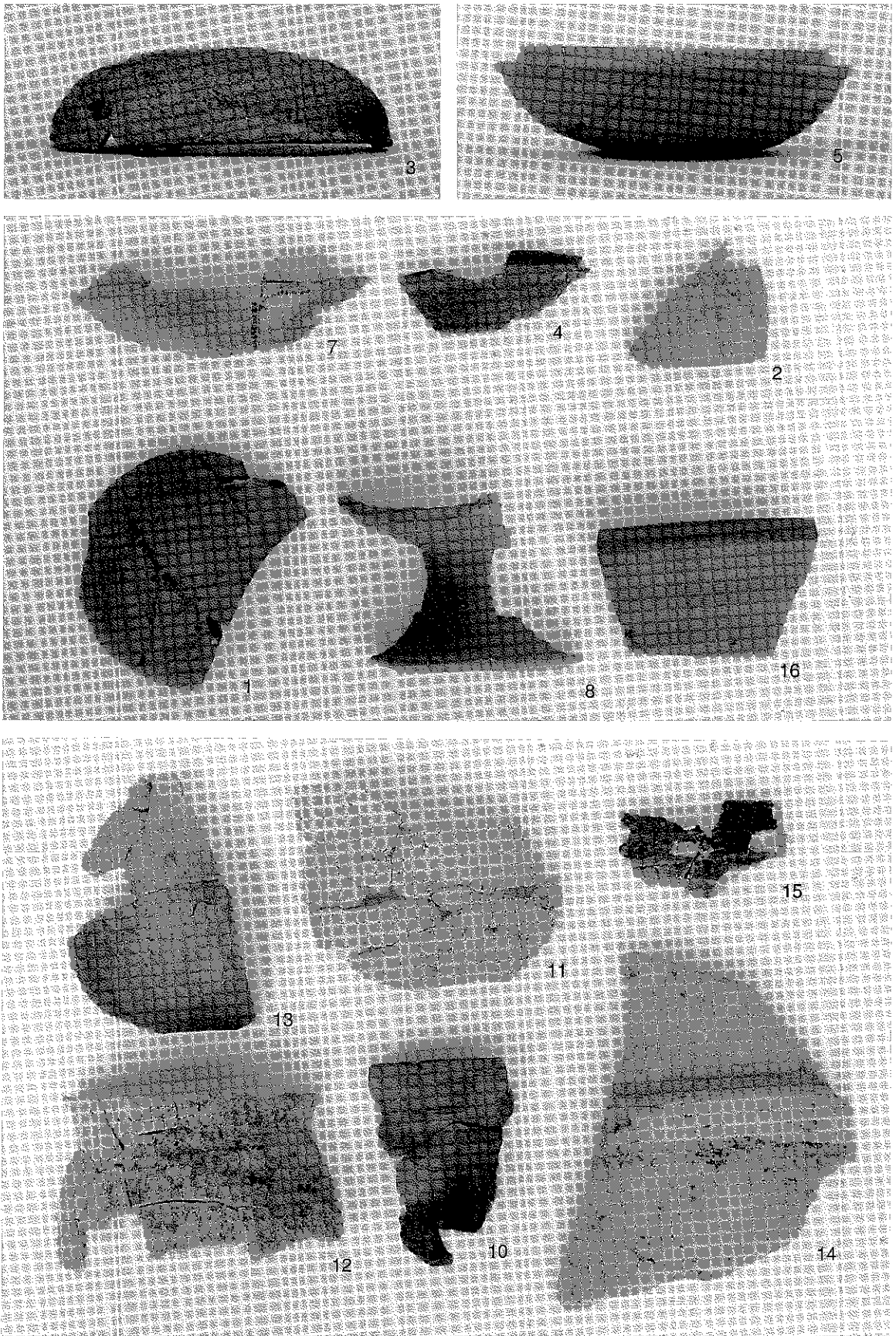
第4図 調査地全景（西から）

したものと考えられる。外部調整は摩滅により失われている。

まとめ 竪穴住居SB01は、西浦遺跡内では最も東寄りに検出した住居である。付近はちょうど低位段丘と丘陵との地形境にあたり、以東には、同時代に営まれた木幡古墳群（宇治陵墓）が展開している。この状況を見れば、当時この境がおおよそ集落域と墳墓域との土地利用境でもあり、両者が近接して存在していたことが理解できる成果となった。さらに埴輪片からは、付近に未発見古墳の存在を想定する必要性がある。また、この古墳時代集落の広がりは奈良時代まで継続するとともに、中世集落も概ね同範囲で広がることも確認できた。これらを踏まえ、今後周囲での開発の際には十分な留意が必要である。



第5図 出土遺物実測図



第6图 出土遺物写真

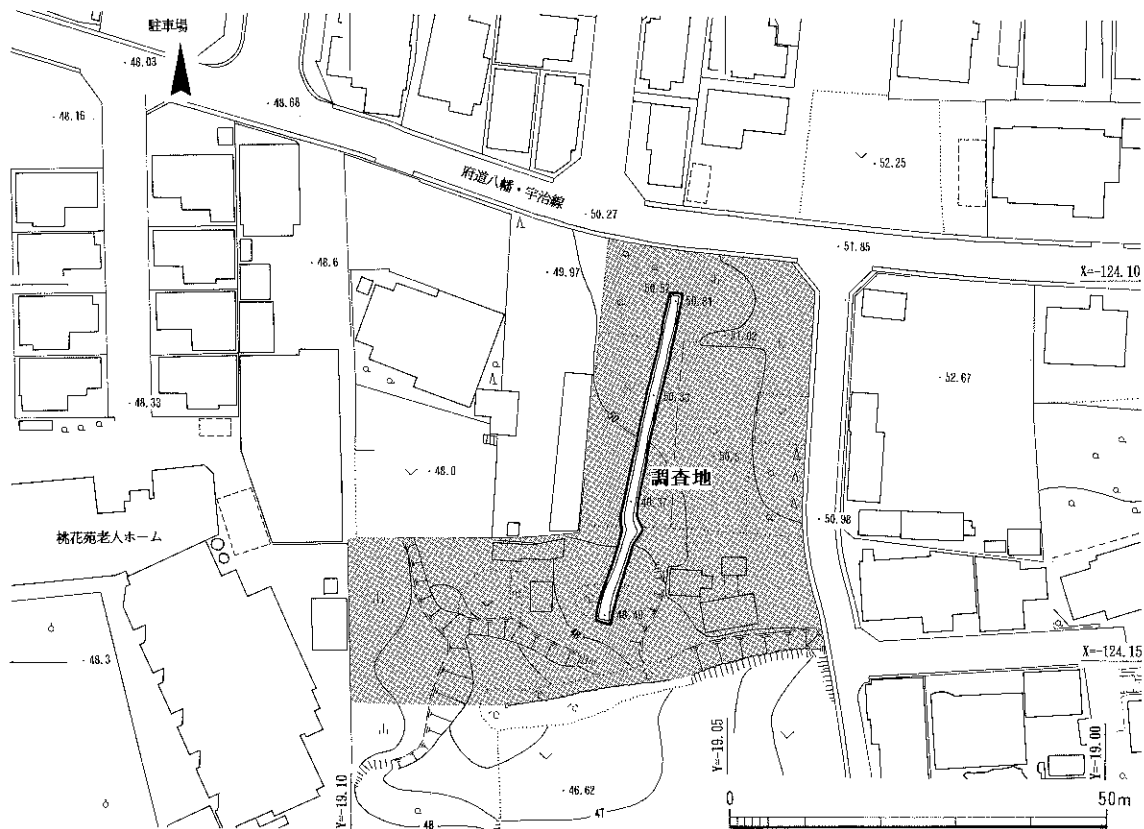


## B. 石塚遺跡

はじめに 本報告は宇治市神明石塚39-7、39-8、39-10で実施した、宅地造成に伴う石塚遺跡の試掘調査の概要である。

石塚遺跡は宇治川左岸域に位置し、市域東部に連なる山地から派生する標高約50mの台地上に立地している。かつて弥生時代の平基式石鏃が採集されていることから、東西約300m、南北約250mを遺跡の範囲としているが、調査は実施されておらず詳細は不明である。近接して、弥生時代遺跡である野神遺跡・神明宮東遺跡が存在するが、同時代遺構の多くは削平によって失われている状況にある。試掘調査は、株式会社エスワイズより宇治市が委託を受け、平成13年8月1日から同年8月3日まで実施した。調査面積は70㎡である。

**調査の概要** 今回対象となった範囲は、北半が畑地、南半が竹や雑木などに覆われる荒蕪地であった。南に向かって約3mの標高差で傾斜する地形であったことから、切り土造成は主に北側部分が対象となる計画であった。そのため、土地の傾斜に沿って幅1.5m×45mの試掘溝を設定し、重機掘削によって表土である茶褐色耕作土の除去から開始した。その直下で赤褐色粘質土を検出し、そのまま漸移的に淡黄褐色粘質土に変化する状況にあったためこれらがいずれも地山であることを確認した。この面上で遺構の検出はなく、遺物の出土も認められなかったため、既に遺跡は削平を受けているものとして調査を終了した。



第7図 トレンチ位置図



第8図 トレンチ全景（北から）



第9図 トレンチ全景（南から）

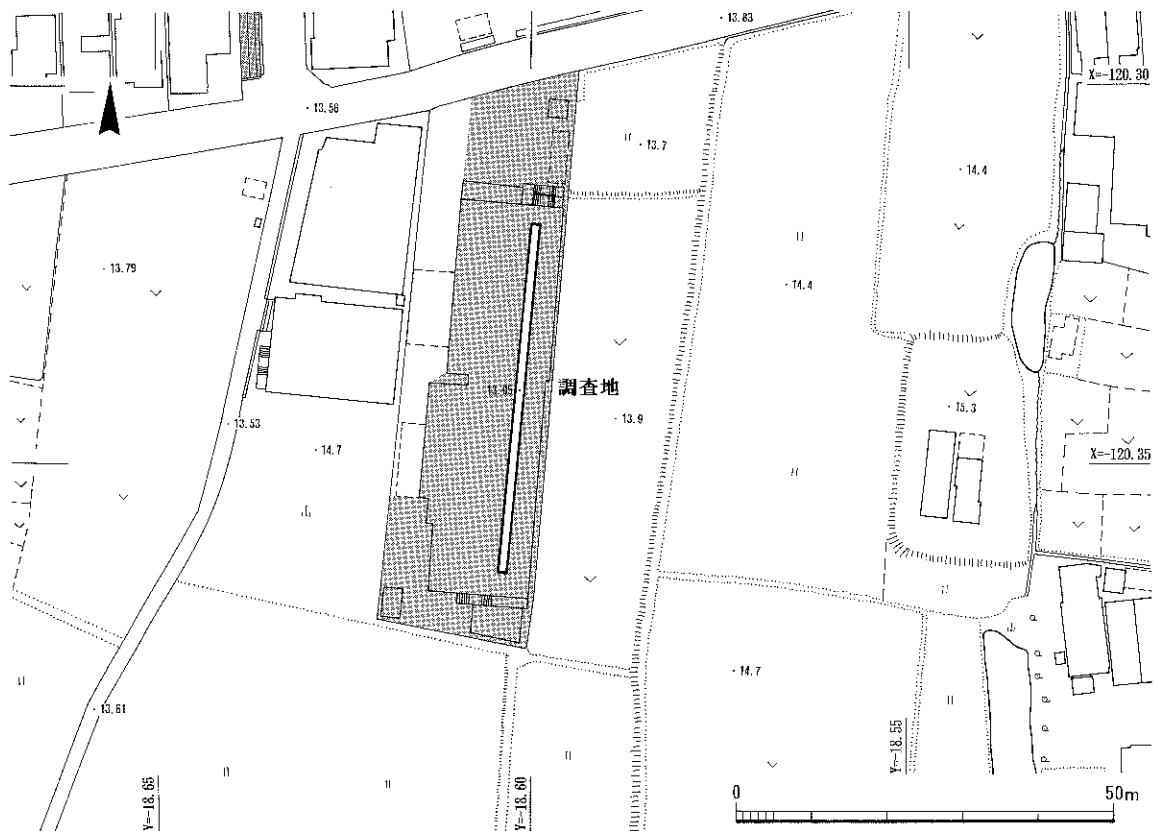
### C. 宇治郡衙推定地

はじめに 本報告は、宇治市五ヶ庄古川45-3、45-11、45-14、45-15において実施した、宅地造成に伴う宇治郡衙推定地試掘調査の概要である。

宇治郡衙推定地は、市域北部に近い旧岡屋郷に位置する遺跡である。付近は、鎌倉時代に作成された『山科郷古図』中の七条六里にあたり「郡里岡屋里」と記載されていることから、旧山城国宇治郡の郡役所が存在した地点であると推定されている。この周辺は、地形上は宇治川の後背湿地から扇状地への変化点に相当し、市内でも低地部にあたる。試掘調査は、有限会社エム・ティ建築事務所から宇治市が委託を受け、平成13年10月19日から同年10月22日まで実施した。調査面積は47㎡である。

**調査の概要** 調査実施時には、既存の工場建物が撤去され整地された状況にあり、重機掘削による表土除去から開始した。その結果、現地表面の約70cm下層に厚さ30cmの旧水田面が存在し、その下層に黒褐色の混礫土が存在することを確認した。途中の湧水により明瞭な遺構は確認できなかったが、旧水田耕作土中から小片化した須恵器・土師器・陶器片が数点出土した。いずれも摩滅度が高く、包含密度も低いため、付近からの流入品と考えられた。

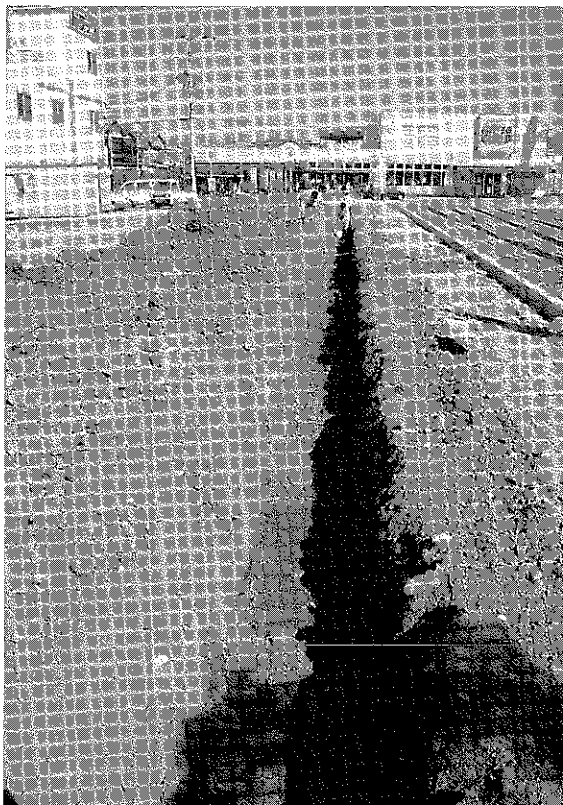
以上の状況から、細片土器の伴う遺構の存在が近隣に想定されるが、当該地には顕著な遺構が存在する可能性は低いと判断し、諸記録を作成した後、調査を終了した。



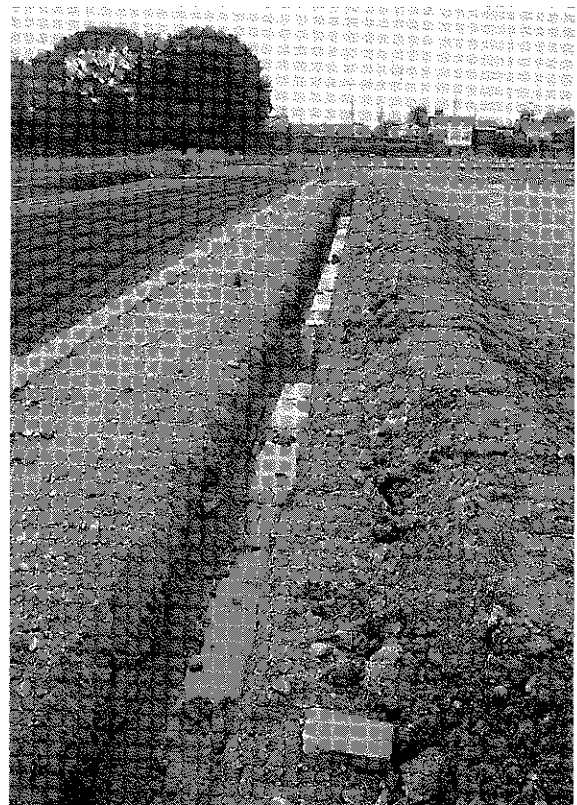
第10図 トレンチ位置図



第11図 調査前の状況



第12図 トレンチ全景（南から）

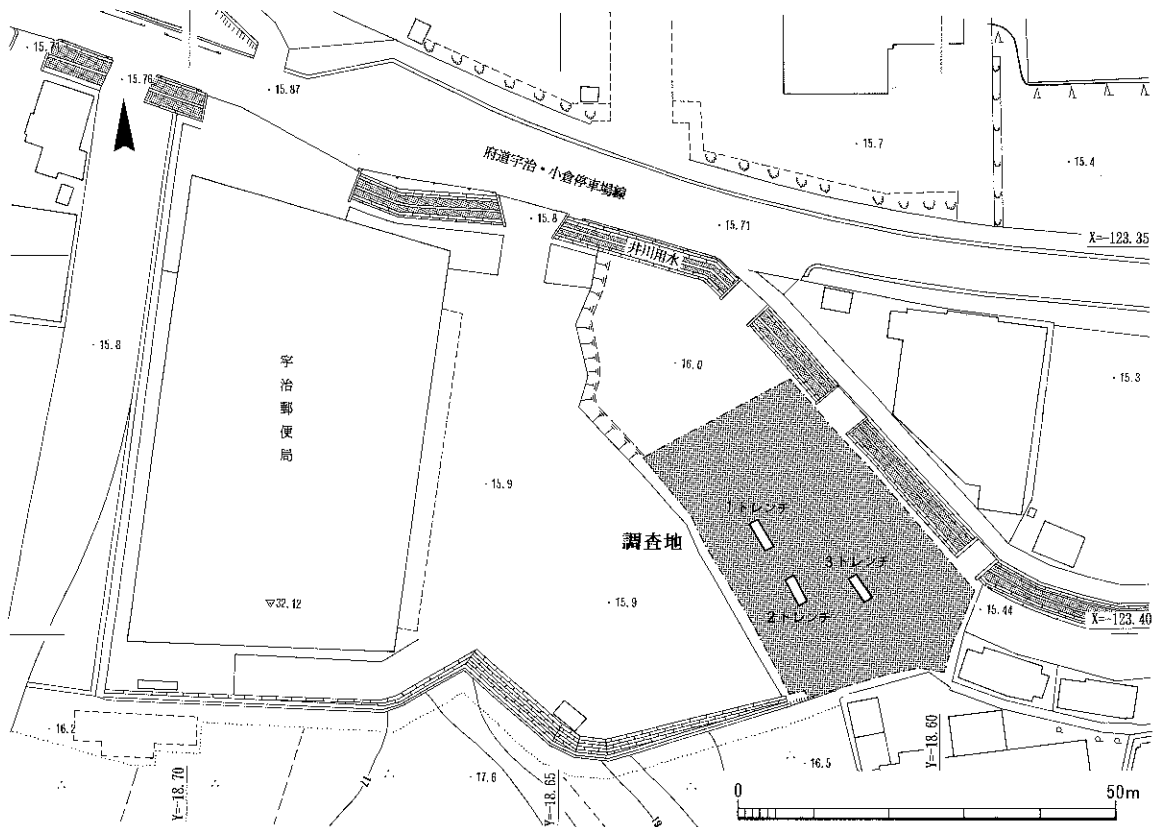


第13図 トレンチ全景（北から）

#### D. 矢落遺跡

はじめに 本報告は、宇治市宇治2番地において実施した共同住宅建設に伴う矢落遺跡試掘調査の概要である。矢落遺跡は、宇治橋の南西約900m付近に位置する東西約400m、南北約250mの遺跡である。旧巨椋池の南岸域にあたり、地形的にみれば池沿岸の湿地帯から扇状地にかけての低地部分を含み込む範囲となる。そのため、池に近づく北寄りでは遺構密度は低く、南寄りで高くなる傾向がある。当遺跡では、平成9年度に平安時代後期の庭園遺構を検出しているほか、平成13年度実施の蔭山1-1での調査では、庭園遺構に加えて鎌倉から室町時代の建物遺構なども検出している。試掘調査は、株式会社アドバンテージから宇治市が委託を受け、平成14年1月16日に実施した。調査面積は12㎡である。

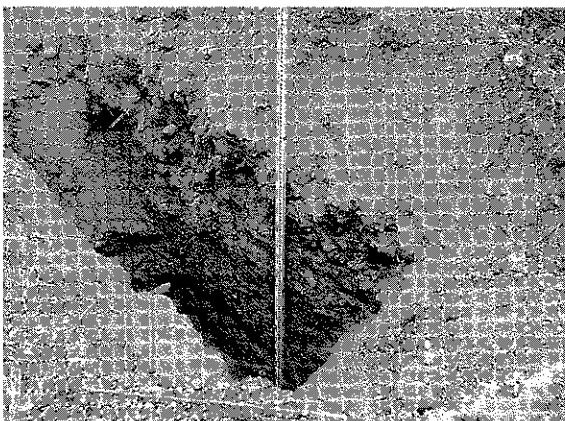
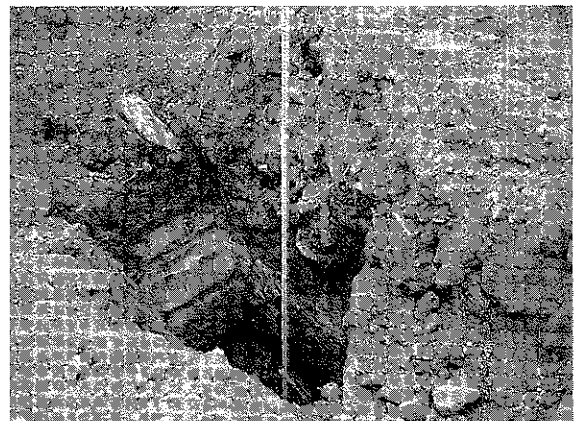
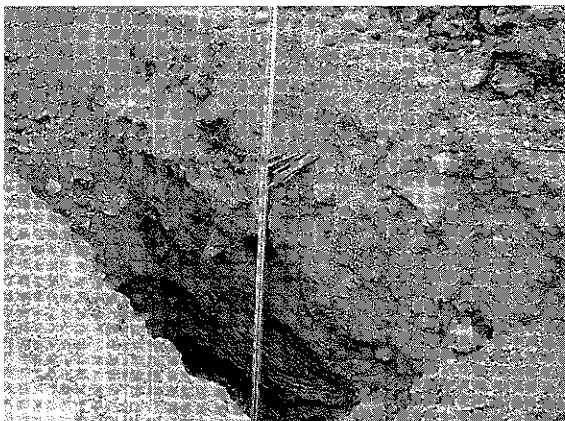
**調査の概要** 範囲内の3地点において1×4mの試掘溝を設定し、重機掘削による表土除去から開始した。各地点とも概ね地表から深さ約2.3mまで掘削を行ったところ、厚さが約1.4m現代盛土、厚さ約0.8～1mのシルト層（黒色シルト、灰白色シルト、灰褐色シルト）、その下層で黒褐色砂礫層を検出した。2トレンチ灰褐色シルト層からは瓦器が1点出土しているが、付近からの流入物と考えられた。このほかに顕著な遺構が確認できなかったこと、土層の堆積状況から、付近が折居川あるいは追手川の旧氾濫原にあたることを理解できたため、諸記録を作成した後に、調査を終了した。



第14図 トレンチ位置図



第15図 調査地全景（北から）



第16図 各トレンチの全景

（左上：1トレンチ（北東から）  
右上：2トレンチ（南西から）  
左下：3トレンチ（北東から）

註)

#### I. 寺界道遺跡発掘調査概要

- 1) 「寺界道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会 1987
- 2) 「寺界道遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第51集 宇治市教育委員会 2001
- 3) 「西浦遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第21集 宇治市教育委員会 1993  
「西浦遺跡発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第30集 宇治市教育委員会 1994  
「西浦遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第51集 宇治市教育委員会 1996
- 4) 「木幡神社遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第45集 宇治市教育委員会 1999
- 5) 荒川史「木幡と五ヶ庄ー古墳時代を中心にー」『許波多ー歴史と文化ー』宇治市歴史資料館 1999
- 6) 近藤義行「南山城の古代集落」『平安京歴史研究』1993
- 7) 「菟道門ノ前古墳・菟道遺跡発掘調査報告書」『宇治市文化財調査報告』第5冊 宇治市教育委員会 1998

#### II. 宇治市街遺跡発掘調査概要

- 1) 「宇治市街遺跡発掘調査概報～東内38番地の調査～」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第47集 宇治市教育委員会 2000

#### III. 平成13年度試掘調査の概要

- 1) 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第18集 宇治市教育委員会 1992  
『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第21集 宇治市教育委員会 1993  
『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第30集 宇治市教育委員会 1994  
『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第35集 宇治市教育委員会 1996

## 抄 録

ふりがな	うじしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう だい52しゅう							
書名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第52集							
副書名	寺界道遺跡、宇治市街遺跡、西浦遺跡、石塚遺跡、宇治郡衙推定地、矢落遺跡							
巻次								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第52集							
編著者名	浜田邦弘・吹田直子・西田倫子							
編集機関	宇治市歴史資料館							
所在地	〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
寺界道遺跡	宇治市五ヶ庄 梅林61-1,62-1	26204	54	34° 54′ 45″	135° 48′ 05″	010612 ～ 010814	570 m <sup>2</sup>	宅地造成
宇治市街遺跡	宇治市宇治 東内40-8、41-6	26204	74	34° 53′ 30″	135° 48′ 45″	010618 ～ 010711	190 m <sup>2</sup>	学校体育館 建設
西浦遺跡	宇治市木幡 中村37-1	26204	52	34° 54′ 58″	135° 48′ 07″	010509 ～ 010514	150 m <sup>2</sup>	共同住宅 建設
石塚遺跡	宇治市神明 石塚39-7、39-8 39-10	26204	35	34° 52′ 52″	135° 47′ 28″	010801 ～ 010803	70 m <sup>2</sup>	宅地造成
宇治市郡衙推定地	宇治市五ヶ庄 古川45-3,45-11 45-14,45-15, 45-16	26204	53	34° 54′ 53″	135° 47′ 50″	011019 ～ 011022	47 m <sup>2</sup>	宅地造成
矢落遺跡	宇治市宇治2	26204	79	34° 53′ 17″	135° 47′ 47″	020116	12 m <sup>2</sup>	共同住宅 建設



収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺界道遺跡	集落	古墳時代 ～ 奈良時代	竪穴住居・掘立柱 建物・溝・土壇	須恵器・土師器・紡錘車	
宇治市街遺跡	水田	古墳時代 ～ 江戸時代	溝	須恵器・土師器・瓦器・ 瓦	
西浦遺跡	集落	古墳時代 中世	竪穴住居・土壇	須恵器・土師器・埴輪・ 石製品（石鍋）	
石塚遺跡					
宇治郡衙推定地				須恵器・土師器・陶器	
矢落遺跡					

## 宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

### 第52集

寺界道遺跡・宇治市街遺跡・西浦遺跡・石塚遺跡  
宇治郡衙推定地・矢落遺跡

発行日 平成14年3月31日  
 発行者 宇治市教育委員会  
 編集 宇治市歴史資料館  
 〒611-0023 宇治市折居台1-1  
 TEL 0774-20-1680  
 印刷 有限会社 新進堂印刷所